



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニーチェとオーヴェルベックとの往復書簡（四）：1887年から1889年初頭まで
Author(s)	古内, 武; Kouchi, Takeshi
Citation	北海道大学人文科学論集, 12, 1-55
Issue Date	1975-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34318
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_PR1-55.pdf



ニーチェとオーヴェルベック

との往復書簡 (四)

——一八八七年から一八八九年初頭まで——

二六四、オーヴェルベックより

古内 武

バーゼル、八七年一月二日

親友よ、一昨晩戻った、全くもって非常な冒険だった旅行を終えて。ドレーズデンまでは二十二時間の筈なのにその三倍以上かかったので、僕がそこで僕のための過ごす筈だった短い期間のうち丸々二日が失われてしまった。クリスマス週の降雪はまさに、知られている最大のものの一つだった、そしてこちらでは雪は大量に降ったけれど静かに降ったのであり特に森林に被害を及ぼしたことが分ったのだが中部ドイツでは物凄い旋風下に降ったものだから大小の道路は忽ちに見えなくなり鉄道網は前代未聞の混乱に陥った。ハイデルベルクからは、——ここが僕の最初の強制的宿駅だった、そして僕はこの機会にローデと再会して初めて彼の実に愛らしい三人の子供たちを見たが、彼は自身をハイデルベルクへ移した愚行のためにまだ非常にふさいでいた、——どれだけ先へ進めるものやら誰にも分らなかつた。ノイエンマルクトのひどい駅とも朝の早い時間に再び付き合つた、以前の全く別の折のことを思い出しながら、そしてバイロイト文化の太陽がまだノイエンマルクトまでは

357

達していないことを感じながらだ。君もまだ昔の不愉快のことを覚えていられることは疑いがないと思う。やっと僕はクリスマス週の第一日の朝にドレーズデンに着いた、少なくとも僕の列車が途中で何時間も、或いは何処かであった様に何日も雪の中に停つたままになったことはなかつた。さらに、クリスマス週の運輸がこの非常事態とぶつかったことは、鉄道と郵便の吏員を絶望に陥らせた、そして線路の除雪作業に要した費用は莫大であり、僕がドレーズデンの或る大蔵省役人から聞いたところでは、ザクセンの国有鉄道だけで百万マルク以上に達する。幸いにも、その様な降雪の後の予想に大いに反して、気温は暖かかった、事実、何とか我慢出来るカタルだけが、この旅行から僕が持ち帰った唯一のメモだ。帰路は何の障害もなかつた。既にドレーズデンへ行く時にハイデルベルクで僕は、前日ケーゼリッツ宛に書いておいた手紙を投函した。それは、誕生日にくれた彼の手紙に対する遅まきの返事だった。彼が今突き抜けねばならない悪い時期に当って、僕の義母がミュンヒェンを離れたことは益々以て遺憾だ。その種の交わりが彼には、僕の知るところでは、他には全くない、それで彼の孤独が何しろ心配だ。秋に僕は最初に獅子の全体を手にした、そしてマリアンネも読んだ。獅子の曲は僕をまたもや恍惚たらしめた、必ずしも序曲だけでなく他の凡ての部分もだ。この曲がなかなか上演されるに到らないことは勿論辛い、作者がしびれを切らさないうちに何とかなれば良いが。——同封の論文を送ってくれたことには本当に感謝する、この論文の精神は兎も角もウィートマンの論文よりは喜ばしい。最近ドイツのあちこちで君の諸

358

著に關して現われたものについては君の、明らかに以前の出版者よりも敏活な出版者が、君に報せていることだろう。僕の眼に入ったのは中央新聞の一論文と文学談話雑誌に載ったコンラート・ヘルマソンの全くの愚論とだ。——君が寒さにそんなに悩んでいることが心から悲しい、ところで今の僕は君の悩み仲間と呼ばれるだけの資格がある。僕の書齋はそもそも寒いのだが、一週間自然に委ねておいたものだから、目下僕はきびしい戦いに耐えねばならない。——君が君の金を受取るのが余りにも遅過ぎたのでなければ幸いだ。僕はそれを僕の出発前に君に送ることは出来たのだ、既に君と僕とのために国庫へ出掛けていたのだからね、しかし数週間前から君の便りが絶えていたので、安全のために君の次の報せを待つことにして、僕の不在中に報せが来たら送る様に用意をし、発送はフラウに委託したのだ、その後一二月二七日にフラウがその委託を果したわけだ。——かれこれ二週間前にテネリッファ無事到着の報せがあった。——水曜にまた講義だ、僕は太急ぎで仕事に戻らねばならない。今日は新年に当って心から元気を祈るのみ、フラウも同じ心だ。君の誠実な

F・オーヴェルベック

① 七六年のバイロイト祝祭の折の共同体験なのだろうと思うが、不詳。

二六五、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八七年一月四日〕

親友よ、金は到着した、有難う！昨日から新住居（ボンシェット

街二九番二階）陽の当る側、絶対に必要、冬がきびしいから。従来

の状態は精神にとっても身体にとってもはや維持不可能。疑問な

のは、次の送金まで金が十分かどうかだ。送金が行なわれそうなのは

三月の何日頃だろうか？——昨日僕は、七つの冬にジェーノヴァと

ニースで住んだ住居を算えてみたら二十一だった。同じ数の辛苦と

不興が、どう見ても存在した。噫、南国的きたならしさ！！ここで僕

はこの何ヶ月かに約四〇の部屋を検分したが、適当なものを見出せ

なかった——僕の様な、思考する清潔好きな動物に適当なものを。

——テネリッファについては僕は良く知っている。そこは、一流の

長所が沢山あるけれど、一つの難点を持っている——弛緩させ沈滞

させる作用が無類なのだ、湿気が多過ぎる空気のためだ、その点で

はニースの正反対だ。しかし、空気その性質が鎮靜的に作用する

病人たちもある（ポー、^①ピーサ、パレルモはその点で似ている）。

友情をもって、君の

① スペイン国境に近いフランスの町。

二六六、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八七年一月九日〕

親友よ、僕の葉書は君の手紙の到着直前に出されたのだ。後者に
 対し心から感謝する！君の健康が、君の受けている良い看護の下で
 回復していれば幸いだ。眼病の場合にこそ最も良くないと思われる
 のは、「人間が独りであること」だ。この冬はこちらもきびしい。

雪の代りに何日も雨が続けている、近くの山々は可成り前から白い
(これは、色とりどりで色にはうんざりしている地方にあっては、

自然の媚態の様に見える——)。この「色とりどり」の中には、相変
らず僕の青い指も入っている、僕の黒い考えも同様。今僕が、その
様な考えを抱きながら読んでいるのは、スインプリキウスのエピック
テートス注釈だ。この中には、クリスト教によって是認された哲学
的規範の全体がはっきりと現われている、だから、一人の「異教の」
哲学者によるこの書は、この上なくクリスト教的な印象を与える。

(ただしクリスト教的情緒界や病理学は全く欠けている、パウロ
が「愛」と言っているものとか「神への畏敬」等)。一切の事実を道
徳によって偽造したものが実にきらびやかに載っている。憐れむべ
き心理学。「田舎牧師」に還元された哲学者。——そしてこれ等凡て
に責任があるのはプラトンだ！彼は依然としてヨーロッパの最大の
災難だ！——

君のN

二六七、ニーチェより

ニース、八七年二月一二日

親友よ、どうにも致し方ない、僕は今回は三ヶ月の期限前に送金
してくれる様にお願ひせねばならない——二〇〇フラン位を元の住
所サン・エティエンヌ小路のジュネーヴ館へ、何故なら僕が住んでい
る新しい家には僕はまだ信用を置けないからだ。この冬はこちらも
きつい、しかし完全に晴れた日日を非常に多く伴っている——そし

361

て僕はまだ一度もストーヴをたいていない。僕の外見は昨冬よりも
良いと僕は言われ、何時も朗らかだとも言われる。しかし僕は僕の
生涯の間いつもそう言われてきたのだ。この人たちは他所の人た
ち以上に表面的なのかも知れない、だから僕も僕の「表面」を持っ
ているのは当然のことだ。——君自身もうケーゼリッツ氏から聞い
ているかも知れないが、彼はその後ヴェネツィアへ帰った。彼はそ
この空気の新鮮さ透明さを賞揚してからこう付け加えている、彼の
この前の手紙においてだ、「澄ミキッタ大気 *aria limpida*、こ
の中で、私が幾つかのものを作り出したであろうことは確かです、
もし私が張り切っていたとすればです。ところが私は半分死んでお
りました。私は、書くためにペンを手に取るのが恐ろしいのです」。
だから僕は心配なのだ、特に僕は、彼の音楽に向けられている一般
的な反感と反対を取り除くために今後何をすればよいのか全くもう
分らないのだから。レーヴィは七重奏曲の演奏をしてくれた、しか
し「彼はツェーリヒのフロイントと同様にこれに対して顔をしかめ
ました——そして彼が私を半分哀れみ半分あざ笑ったことは確かで
す」。

362

君が歌劇をあの様に気に入ってくれたことは非常に嬉しい、しか
し僕はあれを好む音楽家を矢張り探さなければならぬ。ケーゼリ
ッツは、最も教養があり最も好意的であり最も定評のある音楽家た
ちから反対されているのだ。それにも拘らずだ、まさにそのことが
僕に信頼の念を起こさせるのだ。その様でないとすれば、もっと気
遣わしいだろう……彼自身がそのことにあんなに悩んでいなければ、

僕は彼にそのことのお祝いを言いたい位なのだ。何故ならそのことは、真に新しく独創的なものの本来的目じるしなのだから（——教養人たちに反対されているということがだ）。ところで、最近何ヶ月かの間に（最近僕は、いやになるほどに、僕の以前の著作を考えに入れる必要に迫られたのだが）僕の意識に上ってきたのは、十五年前に僕の諸著のどれかに關して、価値豊かで、實質的に——深く面白くて、そして好意的な批判が唯の一つさえも書かれなかつたということだ。そして僕がそれを嘆きはしなかつたということだ。（これが一番いい点だノ）それに反して僕が一瞬たりとも否認しようと思わないのは、別の事実が僕をひどく悲しませ、そしてまた絶えず僕の心にかかっているということだ、つまり、まさにその十五年前に唯一人の人間さえ僕を「発見」せず、僕を必要とせず、僕を愛しなかつたこと、そして僕がこの苦痛だらけの長いみじめな時期を、真の愛によつて慰められた試しもなくに生き抜いてきたことだ。僕の「ツァラトウストラ」全体はこの窮乏状態から発生したのだ——何とそれは不可解であるに違いないことかノそれが及ぼした影響について僕は何と馬鹿げた数々の思い出を持っていることかノそれは立腹させた、少なくとも或る種の人々を。これが今までのところ、その唯一つの深い影響だつた。——ところで——ところで——僕はそのことをも良い徴候と考えるだけの「知性的な」人間だ。最後に、僕は、「僕に關する意見」を大いに氣にかけているだけの暇がない、僕にのしかかっている恐るべき量の諸問題があるからだ。しかも何たる問題であることかノ僕が知っている一切の事柄を考え

る勇氣を僕が持っていさえすれば良いのだが……（これは余り明瞭な言い方ではないね、親友よ。知らず識らずのうちに明瞭さへと教育してくれるフランスに僕が暮していることは、良いことだ）。奥さんによろしく、そして君の冬について早く報せてくれ給え、つまりこんな冬における君の健康についてだ。

君の F・N

「欄外に」君に H・テースについて書いたかしら？そして彼が僕を「非常ニ示唆的」と考えていることを？そしてドストイェフスキーについて？

「浅薄」の意味があることは勿論である。

二六八、ニーチェより

「ニース」(八七年二月二三日、水曜)

親友よ、今日は君の手紙と、僕を大いに安心させてくれた送金とに対する感謝のみだ。生涯の間に僕の「ラテン語」がこれほど行き詰ったことは稀だ。その上に僕は病氣であり、上品ニ *comme il faut* 軽い咳をし、寒けがしている。それなのにニースのやかましい謝肉祭が僕の窓の前と言つてもいい位のところで催されている……

ヴェネツィアの作曲家 *Masciro* の手紙を同封する、君が喜ぶだろうと思うから。僕はあんなに心配していたノしかし良い方へ向っている。ツューリヒのヘーガル氏を動かして彼にちよつとした親切行為を示して貰おうとした実に間接的な小さな僕の陰謀がうまく

行つたらしい。

僕がこの春ツューリヒへ行つて、ヘーガルがミツカ²シャルダッ
シュを僕のために演奏してくれるとなれば、僕は君をそれに招待す
ることを忘れはしないだろう。

ドストイエフスキーについて僕は数週前には名前さえも知ってい
なかつた——「新聞雑誌」を全然読まない無教養人の僕だからね、
或る本屋で偶然手に取つて見たのが、フランス語で翻訳されたばかり
の作品、地下ノ精神 *l'esprit souterrain* だつた（二一歳の時のシ
ョーペンハウアーも三五歳の時のスタンダールも全く同様の偶然的
出来事だつた）。同族の本能（或いは何と名付けるべきか？）が直
ちに声を発した、僕の喜びは非常なものでつた。同じ様な喜びを思
い出そうとすればスタンダールの赤ト黒 *Rouge et Noir* を知つた
時まで戻らねばならない。（二つの短篇から成り立っていて、最初の
ものは真に一個の音楽、非常に異質な、非常に非ドイツ的な音楽で
あり、第二のものは心理学の奇行、汝自身ヲ知レ *vous le connais*
の類の一種の自己侮蔑だ）。序でに言へば、このギリシャ人たちは良
心の呵責が沢山あるのだ——贗造は彼等の本来的手仕事であつた、ヨ
ーロッパの全心理学がギリシャ的浅薄性に病んでゐる、そしてユダ
ヤ的なものが少々なければ……

この冬に僕はルナンの「起原」³をも読んだ、大いに意地悪な気持ちに
駆られたがらだ——益は僅かだつた。小アジアの状態と感情 *senti-*
ments とのこの歴史全体は、奇妙に宙に浮いてゐる様に思われる。
結局僕の不信の念は、歴史がそもそも可能なものなのかという疑問

にまで立ち到つてゐる。一体何を確証しようというのか？——それ
が生起した瞬間には「確実では」なかつた事柄をか？——親友よ、
僕たちの時代のドイツについては何も言うまい、僕は今ズイーベル
の名著を仏訳で読んでゐる、関連的諸問題についてトクヴィルやテ
ーヌの学校を卒業した後だ——そこに僕は例えばこの様な誇らし
い思想を見出した、「九月ノ虐殺ノ恐怖ニ導イタ利己心、貪欲、狂
暴、残酷ヲ生ミ出シタノハ、封建ノ制度デアッテ、ソノ制度ノ没落
デハナイ」。これは、「自由主義」であるという自負と自覚を持つて
いる言葉の様に思われる。中世の社会秩序全体に対するこの様な誇
示された憎悪が、プロイセンの歴史に対する実に思いやり深い取り
扱いと見事に調和していることは確かだ。例えばポーランド分割に
関して。（モンタランベールの西洋ノ修道士タチ *Moines d'Occi-*
dent を知つてゐるかね？というよりむしろ、この作よりも着実で
あつて党派的でなく、しかしヨーロッパ社会が修道院に負うてい
る恩恵を明るみに出そうという同じ意図を持つてゐる作品を知つてい
るかね？）

この冬は僕には気持が良い、幕あいでの回想の様に。信じられな
いほどだ、僕はこの十五年間に相当数の著作を世に送つた、そして
最後にそれ等に序文や付録を付けて「仕上げをした」から、僕はそ
れ等を「解放してやつた」と見なしてゐる、——そしてそのことを
僕はお笑い草にすることが出来る、僕は本当は一切の著作づくりを
あざ笑つてゐるのだがね。要するに、僕は自分の生涯の最もみじめ
な年月をそのために消費してきたに過ぎない。

誠実をもって、君の古い友

N

著作的ナラザル人間⁶

水曜（八七年二月二三日）

君のN

① ラテン語が行き詰るといふのは、途方に暮れること。ニーチェは「ラテン語」は得意であった。

② ガストの作品。チャルダッシュはハンガリーの舞踏。

③ クリスト教の起原史。七巻（一八六三—一八八三）。

④ 一七八九年から一七九五年に到る革命期の歴史（一八五三—一八五八）。

⑤ この引用文は仏文。

⑥ *homo illiteratus*

二六九、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八七年二月二四日〕木曜朝

親友よ、僕の昨日の手紙では当日の事件（「ニースの地震」）に余りにも注意を払わなかった。だから新聞を送る。また自明のことだが、僕は元氣と落着きを少々広めるために出来るだけのことをやっている、何故なら驚愕は非常なものであり、町は神経系統の混乱に満ちているからだ。——昨夜は二時から三時半の間、知っている人たちを訪ねて一巡したのだが、皆んな露天で暗い気持で夜を過ごしていた——彼等の健康には非常に悪いだろうと氣遣われる、何しろ寒い夜だったから。小さな揺れが幾つも来た、犬どもが吠えた、ニースの半分が倒れていた。僕自身は巡検の前にも後にも良く眠った。一番まずいことは、これでシーズンが突然終ってしまったことだ。

ところで僕はさらにこれ以上のことがやってくるだろうと思つて、一切に対して用意が出来ている、今までのところ朗らかだ。天気は素晴らしい。君と奥さんのお元氣を祈る！

二七〇、オーヴェルベックより

バーゼル、八七年三月二一日

親友よ、君がニースで体験した大惨事の際の君の様子について早速報せてくれたことに礼を言わないまま殆ど一ヶ月が過ぎた。惨事の巨大さについて僕にはまだ全然分っていないなかつた時に君からの送付物が到着したのだ、それによつて僕たちが特に氣付いたのは、君が何年も宿をとつた後に最近になつて離れたばかりの通りが格別ひどくやられていることだつた、しかし君自身は無傷であつたばかりか平生の生活ぶりをさして妨げられることもなく、ただ自発的にのみ他人の困窮の助け手として君の夜の安息を放棄したらしい。このことは非常な安心を与えてくれた、そして差し当り君のことを心配し続けるよりは、むしろ僕たちバーゼル人自身のことでも心配する方が當を得ている、何しろ僕たちも近々のうちに見舞われることが地震学者ファルプの予定表に載っているものであり、もし五百年以前の記憶を思い出と呼ぶことが出来るとすれば幾多の思い出を持つてゐるのだ、そしてその様な見込によつて少々不安になっているのだ。何れにせよ既にもう僕たちとのところの自然は少々だが外れている。つい昨日も凄まじい猛吹雪だつた、今日は雪解け、しかし先週はま

だ今冬中で最も寒い日日、或いは夜夜だった。僕が恐れるのは、このために君がまた大いに悩まねばならぬのではないかということだ。最近の降雪はまたもスペインにまで及んだのだからね。こちらでは病氣の話が多く耳に入る、特に肺炎だ、そして今日になって、こんなにも早く亡くなるとは思えなかった婦人として君もまだ覚えていないに違いないハーゲンバッハ夫人がそのために斃れた、あのアンティステス・シュトックマイヤー夫人と同様に。僕のフラウと僕とは無事に過ごしてきて、確かに頑固だった僕たちの風邪をも数週間には克服してしまった。——ところで君のツューリヒ旅行はどうなっているかね？差し当り続きそうな風と荒天にも拘らず実行するのだろうか、そして君は実際にケーゼリッツのために何かを達成したのだろうか？君が僕に通知をくれれば僕は勿論君に大いに感謝する、そして休暇中なら行くだろう、休暇でなくとも日帰りだ。始まったばかりの休暇は、まだ一ヶ月続く。先週はフラウと今冬初めて劇場へ行きヴェルディのトラヴィアータを聴いた、その他にはヘックマン指揮の優れたケルンの弦楽四重奏だけだった、だから僕は音楽のデザートを欲する気持を今も断然持ち続けており、何とか君とまた会えないものかと思っている。ところでケーゼリッツに関する上記の質問に対する答は、同人の手紙から得られる。彼のチャルダッシュは次の冬には確かに見込があるらしいからね。同封して返送するこの手紙は本当に有難う。彼の二度目のヴェネツィアへの逆戻りは最初の時ほど驚かなかったことを君に書いたかどうか僕は思いつかない。ミュンヒェンでは僕は、彼にとって都合のよいことが何も

見当らなかつた。ヴェネツィアで彼は、一切がどんなにまだ不確実であつても、少なくとも自分の仕事を、差し当り元気で再開するものと思われる。——君が述べている目的のためにはモンタランベールのおしゃべりな賞讃演説的著作よりもレッキのヨーロッパ文化史の方が好都合だろうと思う、しかし僕はこの書そのものは読んでいない、僕は持っていないし、そもそもパーゼルにはないのだ。とも角もモンタランベールはルナンの七巻本よりは教えるところが多い、それにしても君がこの七巻を読み上げたことに僕は驚いている。前者は実に着想に富んでいる、ただし決定的な要素と全く勝手な要素とが殆ど同じ歩調で *pari passu* 歩んでいる。そしてあらゆる歴史記述に対する懐疑に同書が特に合っていることは確かだ。——ドイチェ・ルントシャウは君の手に入るかね？二月号と三月号にリヒャルト・ワーグナーの書簡十五通が載っていた、以前ツューリヒで彼の友人だったウイレ夫人が緒言と注釈をつけて発表したものだ。僕は全体を非常に面白く読んだ、そして同夫人についても非常に優秀な人物だという印象が残っている。——来週また一〇〇〇フランを君のために受け取るから指示を頼む、お望みの額を送るべき宛先の報せも同時に。フラウが呉々もよろしくと言っている。君の誠実な

F・オーヴェルベック

二七一、ニーチェより

〔ニス、一八八七年三月二四日、木曜〕

親友よ、今お便りを受けた、——そして僕が来週末にここを去りたいと思つている（また、去らねばならない）ことを考えると——君に直ぐ返事を書かねばならない根拠が一つ多い。「再会を期す！」と書ければいいのだが、僕の健康は差し当りツューリヒ及びそれと関係のある事柄を僕に禁じている。僕は妙に衰弱している、その後ずっとなのだ、疲れていて精神的にも肉体的にも不快で何にもやれない、また騒音や実に小さな腹立たしいことの一切に対して我慢がならない、それで或る全く静かな離れたところへ逃げたいと思つている、つまりマジョーレ湖畔の森と散歩の町だ——名前はカノピオ。その近くに、良い宿だと推薦された宿泊所バディニア荘があるのだ、所有者はスイス人だ。そこに四月四日に着くと通知してある。ヴェネツィアは、春が近づいているこの時期には伝統を持っているのであつて、僕の本気の愛情の場所（僕が愛している地上唯一の地）なのだけれど、毎年僕の健康には悪かった。その原因は、僕には分り過ぎていて全く特定の氣象学的諸要素にある。——来週の水曜か木曜頃に僕が一〇〇〇フランを手中にすることは可能だろうか？——

アーダムス博士という人が一ヶ月ほど前からここにいる、ローデとグートシュミットに学んだ文献学者で天分も能力もある様に思えるのだが文献学一切に猛烈にいや気がさして断然哲学に身を捧げようとして決心して、それでここへ、彼の「巨匠」のところへ巡礼を行なつたのだ。彼を幻滅させ、そしてその様な意図の曖昧性から救い出

370

してやるのが、うまく行くかも知れない。僕は彼を柔らかに哲学の歴史へと案内してやる（彼は今までは「ディオドールス原典ニツイテ de fontibus Diadori」の仕事をしてきた）、——早くも、僕が僕の見捨てたままになっているラエルティウス研究を再び取り上げるといふ可能性がないでもない！ところでこの全体が僕にとつては、以前の苦勞（一八八二年のタウテンブルクの夏）『ルー・サロメ嬢に對するニーチェ哲学の手ほどきを指す』を思い出させる苦勞だ、そして結局のところ僕は、この様な場合における世の報酬が何であるかを知る程度には世の中を知っている。——僕は「若い人たちが嫌いだ。——

序でに、益々僕に意識されてくる滑稽な事実を一つ。僕は次第に、或る「影響」を及ぼしつつある、ごく地下的なものであることは勿論だ。あらゆる急進的党派（社会主義者、ニヒリスト、反ユダヤ主義者、正教信奉者、ワグナー崇拜者）のもとで僕は奇妙な、殆ど神秘的な声望をかち得ている。僕が身を置いた雰囲気極端な純粹さが誘惑するのだ……僕は僕の奔放性を濫用することさえ出来る、最近著でやった様に罵りの言葉を吐くことも出来る——読者はそれに苦しめられており、僕を「お祓いしている」かも知れない、しかし僕から逃れるわけには行かない。「反ユダヤ主義通信」（これは個人的にのみ送られる、「信頼出来る黨員」にのみ）の中には僕の名前が殆ど毎号現われる。神人ツァラトウストラは反ユダヤ主義者たちを魅了したのだ。その独特な反ユダヤ主義的解釈が存在するのであつて、僕は大いに笑わせられた。ところで、僕は「その筋に

対して」、純ユダヤ或いは半ユダヤ系のドイツの学者、芸術家、著³⁷²イパーにもあてはまる。

① ルツェルン北方のハルウイール湖の北端にある。

述家、俳優、演奏家の綿密な表を作ることを提案した。このことは

ドイツ文化の歴史に、またその批判に寄与するところ大であろう。

(内々の話だが、以上のこと一切に僕の義弟は全く関係がない。僕は彼とは非常に丁寧に文通しているけれどよそよそしく、そして出来るだけ稀にだ。序でながら彼のバラグアイ事業は繁栄している。

僕の妹も同じ。)

カノピオで調子が良くならなければ、ブレステンベルク¹でちょっとした水治療を試みることを考えている。噫、僕の生活は一切が実に不確定でぐらついている、しかもこのひどい健康ノ他方、僕の上に一万ポンドの重さでのしかかっている必要事がある、即ち一つの連関的思想構造を次の数年間に作り上げることだ——そしてそのために僕は五つ六つの前提条件を必要とするのであって、これ等凡てが僕にはまだ欠けており、そして獲得不可能とさえ思われるのだ！

——僕のツァラトウストラの第三部と第四部が作られたジュネーヴ館の五階は、地震ですっかりめちゃめちゃになったので今や完全に取りこわされることになった。この無常は僕を悲しませる。——地面は今でも時折揺れる。——心から元気を祈る、奥さんに對しても、

君のニーチェ

(テネリッファから良い報告があればよいが?)

〔欄外に〕レッキは僕自身が所有している、しかしこの様な英国人たちには「歴史的感觉」とその他さらに若干のものが欠けている。同じことが、非常に読まれており翻訳もされているアメリカ人ドレ

二七二、ニーチェより

カノピオ、バディニア荘、一八八七年四月一四日

親友よ、四月三日からこのマジョーレ湖畔にいる、金は丁度よい時に到着した、そして君が全部を送ってくれなかったことも有難かった、何故なら僕はこの夏を何処で過ごすことになるのか今でもまだ良く分らないのだから。これを述べるのは嬉しくないのだが、長く親しんだズィルス＝マリーアは放棄 *abgegeben* されねばならない、ニースと同様に。つまりどちらの場所もあの本質的な第一条件が失われてきたのだ、即ち孤独、深い静穏、隔離、疎遠、これがないと僕は僕の諸問題へ降りて行くことが出来ないのだ(何故なら、内緒で言うが、僕はまさに恐るべき意味において深みの人間なのだ、そしてこの地下的作業なしには僕はもはや生に堪えられないのだ)。ニースにおける僕の今度の冬は、この前のズィルス滞在と同様に、拷問の苦しみになった。僕にとって生存の条件であり健康に到る唯一の道でもあるあの静かな隠遁が僕から失われたからだ。一年一年とこの健康はまた悪くなってきた、そして健康が僕にとつては、僕が僕の道の上にあるのか——それとも他人の道の上にかを計る確実な物差しなのだ。僕の上ののしかかっている諸問題を僕はもはや回避せず(あらゆる回避に対して僕は何という償いをせねばならなかったことか!例えば僕の文献学に対して)、言葉通り昼も夜も休息を

知らないのだが——それ等の諸問題は如何なる誤った関係（人々、場所、書物との）に対しても残酷な報復をする。僕はこのことを君の耳にそつと言うのだ、何故なら僕の創造の奇妙な諸前提が自明のことであるなどと前提するわけには行かないからね。僕は人々に対して余りにも柔和で、余りにも思いやり深い様に思われる、また僕は、何処に暮そうとも直ぐに人々によつて余りにも多く占領されてしまつて、結局彼等に対して身を守ることが出来なくなつてしまふ。この考慮のために僕は、例えばミュンヘンを試して見る気になれない、そこには僕への多くの好意が用意されているのだが僕の生存の本質的第一条件に対する畏敬を持っている者が一人もないのだ——或はその条件を僕のために作つてくれようとする人が。「欄外に。僕には大きな図書館のある場所が僕の「幕あい」として必要だ、結局僕はシュトゥットガルトを考えた。シュトゥットガルト図書館の非常に自由な規約を送つて貰つた。」自分たち自身が堪えられないと感ずるきびしさで身を処している者がいることを認めさせられることほど人々の癪にさわることはないのだ。現在のドイツに旅行して、僕に「好意的」だと信じ込んでいる多くの氣立ての良い人たちを近くで眺めることほど、僕を麻痺させ元氣をなくさせることはない。差し当り僕に対する一切の理解がまさしく欠けている、そして一つの確率的推理が間違いでないとすれば一九〇一年以前には違つた風にはならないだろう。僕が僕自身について考えていることを洩らしたりすれば僕は簡単に氣狂いと見なされるだろう。僕について一般に分らないままにしておくことは、僕の「人間性」に属する。

僕的最も尊敬すべき友人たちを僕に対して立腹させることになりかねないし、誰を喜ばせることにもならないからね。

ところで僕は相当の量の仕事をやつてのけた、僕の以前の諸著の検閲と新版に關してだ。間もなく僕が終りになるとしても——そして

僕は死への要求が益々深くなることを隠しはしない——それでも僕の何が残るのだ、他の何ものによつても当分取り換えの利かない一片の文化だ。（この冬に僕はヨーロッパの文献を十分に見回した、そして現在僕は、僕の哲学的立場が断然最も独立的なものだと言ふことが出来る、たとえ如何に僕が自分を数千年の遺産の相続者と感じているとしてもだ。現在のヨーロッパは、如何なる恐るべき諸決定の周囲を僕の全存在が回っているのかをまだ全く予感してない、さらに如何なる諸問題の輪に僕が結び付いているのかを——そしてさらに、その名を僕は知っているのだが言わないであらうところの一つの破局が僕と共に準備されているのだということ。）

親友よ、四月末頃までは僕がまだここにいるものと考えてくれ給え。僕がマッサージ治療をしたいと思つている（五月に）あのブレステンベルクはここからどう行けばよいのだろうか？マンメルンも勧められている。

僕のヴェネツィアの校正係の手紙を同封する、僕たちは悦ばしき知識の印刷に熱心になつてゐる。この手紙から君は、ミツカ「チャルダッシュ」を聴くためのツェーリヒ招待を取り消さねばならない僕のお詫の氣持をも汲み取つてくれるだろう。

何れにせよこの春に一度君と会いたいと思う。

誠意をもって君の友

N

宛先、カノビオ（マジヨール湖）バディール荘。

〔欄外に〕バディール荘の一八八五年の宿泊人名簿にこう載っている、ドレーズデンのマリー・オーヴェルベック嬢 *Mademoiselle Marie Overbeck, de Dresde*。奥さんよろしく、そしてテネリッファからの良い報せに対して感謝する。ここまでの旅行は全く冬の様で、僕の頭痛の激しい爆発のために中断された（僕の旅行は凡てこうなのだが）。ラヴェーナ²では氷の様に冷たい恐るべき一夜、絶えず嘔吐。——一昨日と昨日は病気の発作のぶり返し。今日は楽になっている。

① ボーデン湖の西端付近、スイス側湖畔の水療院所在地。

② ラヴェーナの誤りであろう。ラヴェーナはマジヨール湖東岸の町で、ここからカノビオへ船で行ける。ルガーノ湖西岸にラヴェーナという小部落があるけれど、ニーチェがそこに立ち寄ったとは思われない。

二七三、ニーチェより

〔葉書、消印はツューリヒ、八七年四月二九日〕

親友よ、昨日（木曜）晩にこのツューリヒに着いた、ネプトウー
ン館だ。そして今日もう僕に分っているのは、ここに長く留まるこ
とが僕には絶対に不可能であること——涼しくて蔭のある処へ逃げ
ねばならないことだ。このゆるんだ柔らかい空気、そしてそれ以上
にこの陽光は、僕が今は少なくとも戦うことを許されていない敵共

だ。ところで君と今会うことが僕には最高度に望ましい。僕がこ
んなにひどく消耗していなければ（最近、発作が続いた）、僕がパーゼ
ルへ行くのだが。しかしどうだね？明日（土曜）にここへやってき
て夜を過ごして日曜に帰るわけには行かないだろうか？（勿論僕の
客として）。この願いを僕は君の傍に置く、これ以外には僕たちが会
える見込がなさそうだ。ブレステンベルクもマンメルンも僕には暖
か過ぎる地帯にあり、その様な地帯の悲惨な影響を僕は昨年から記
憶の中に持っている（五月のナウムブルク）。

誠実と愛をもって、君の

ニーチェ

二七四、ニーチェより

〔葉書、消印はツューリヒ、八七年五月四日〕

親友よ、君の来訪は僕には本当の清涼剤だった、僕は心から感謝
する。ところで依然としてツューリヒは余りにも日が照りつけるし
うるさ過ぎる。僕は近日中にここを離れる。——ブライプトロイの
書は僕に陰惨な感じを与える。不満者ばかりがいるドイツなどは、
僕の故郷でないことは確かだし、ましてや僕の希望どころではない
ノ——同じ日に僕が読んだのは一人の不満なフランス人、独立的な
男だ（何故ならこの男のカトリック信仰には今や、自由思想に属し
ているよりも多くの独立性が属しているから）。即ちバルベ・ドルヴ
イイ著、作品ト人物、歴史ノ人気書。これを読み給え、僕が責任を
持つよ。これは読書クラブに採り入れられるべきだ。（小説家とし

「氣の利いた皮肉」ではないのかという疑いを抱いていたことは明らかだ、他方テーヌは、自明のことだが、まず第一に僕の書に「深い情熱性」を感じた。――

さらにもう一つ別の書類を同封する、パラグアイに関する僕の義弟の「声明」だ。実際、妹夫妻は遂に成就した地所獲得で大いに得意であり幸福である様だ。小さな侯国ぐらゐの大きさ（十二平方マイル）の土地は素晴らしい喬林を含んでおり、あらゆる種類の貴重な用材がある。木材の乏しいアルゼンチンとの木材取引きを頼りにしており、そのための水路を持っている。今までのところ万事が実によく行っており、その政府の側からフェルスター博士はさまざまに特別扱いを受けている。そして僕の妹は非常に忙しくなった、何しろ彼女の家がパラグアイの人々の一種の寄合所になってしまつて、そこではスペイン語、英語、ドイツ語、フランス語が話され、稀には十四人で食卓につくこともあったのだから。最も新しい獲得物はドイツ人のパン屋とドイツ人の肉屋、それから非常に貴重なドイツ人医師だ。

それから「ブライプトロイ」をもお返しする、この人に僕は一瞬たりとも忠実でありたいとは思わな^い。僕は彼の自負が実際の質を基礎としていると考えることが決して出来ないのだ。如何に僕が「若い人たち」のその様な自負に驚いて直ぐ顔をそむけたりはしない様になつていゝとして。『著作』以外のものに対しては感覚も眼も持つていない人間に読んで貰うためにこのブライプトロイは、平凡極まる新聞＝糞尿の真只中で豚の如くに書いている、言葉の如

380

何なるニュアンスにも全く鈍感になつてだ、彼の怒りは説得力がない、彼の機知は「ががああ騒ぎ」と呼ばれているもの以上のものではない――しかも彼の哲学の背景とては、何等の美学をも持つていない。現在のドイツにおいてバイロンやスコットなどは、それと調和しているのがゾラ崇拜だ、しかも何という心理学的貧弱さだ、例えば彼はドストイェフスキーの最近作を無造作に拒否している、（如何に心理学的に顕微鏡の様な鋭い眼を持っていても人間の価値を全然増しはしないのだ、ということこそ、まさにドストイェフスキーの問題だったのであり、これが最も彼の関心を惹いたのだ、恐らく彼がそのことをロシアの環境の中で身近に体験することが余りにもしばしばだったからだろう、序でながらそれを理解するためには、最近フランス語に翻訳されたドストイェフスキーの小作品「地下ノ精神」をお勧めする、これの第二部は非常に事實的なあの逆説を殆ど恐ろしいほどに明らかにしている。――）

左様なら、わが親友よ、そして奥さんに心からよろしく、誠実をもつて

〔欄外に〕

君のニーチェ

覚書。僕は早朝にカルスバートの塩でちよつとした治療をやつていゝる（――この場合に食餌は何を用心せねばならないのだろうか？酸っぱいもの、バター、果実等だと思ふが？）

1. クールの町の南部の高台。

2. ブライプトロイは「忠実なれ」の意味を持つ。

③ Geschlechter. これが Geschlechter (があがあ鳴くこと。おしゃべり)の訛であろう。

二七六、ニーチェより

ズィルス—マリーア、上部エンガディーン

一八八七年六月一七日

親友よ、今までのところ僕はこの高地においても、病気であること以上のことは余り出来なかった。僕の頭脳の激しい発作と一緒に到着し、十二時間吐き続けて、この僕の小さな部屋にとつては遺憾ながら余りにもおなじみの例の状態の中にあつた。その状態の後にやってきたのはひどい全身的な風邪で、熱、不眠、食欲欠如、めまい、麻痺、衰弱を伴っている。それで僕は思う様に歩くことも出来ず、直ぐに汗をかく(雪の近くにいますのにだ、つまり僕の窓の前にはなだれの残りがあつた)。それにも拘らず僕が嬉しいのは、僕が再びここに居ること、そしてそもそもまだこうやって存在していることだ……最近の数年を持ちこたえること——このことは僕の運命がそもそも今までに僕に要求したことの中で最も困難なものだったかも知れない。僕のツアラトウストラの様な、心の奥底からの呼び掛けの後に、返事の一声どころか全然何にも耳にしないこと、今や千倍となった音無き孤独のみが続いていること——これは一切の理解を越えた恐ろしさを持っている、これによつては最強者も没落し兼ねない——噫、しかも僕は「最強者」ではないのだ! その時以来僕は死ぬほど傷つけられた様な気持で居る、自分がまだ生きているこ

とが僕を驚かせる。しかし疑いなく僕はまだ生きている、僕が一体この上に何を体験せねばならないのかを知る人があろうか!

ツェレリーナ^①は全然駄目だ、何しろ老將軍ズィエモンが死んでしまったのだ、そして旅館主は取り決めてあつた条件をちゃんと守ろうとしない。僕に実に好意的だつたあの謹厳な老軍人を失つたことは實際僕にとつて損失だ。彼は僕にとつて、カント的に言えば「実践的理性の批判」であつたことが実にしばしばだつた、それで僕は

381

今や、外国にあつて、本当に今までもよりもずっと頼りない「非実践的な」状態にある。彼はズィエーナで死んだ、七一歳だつた。一八四八年の事態が少し違つていたとしたら彼は当時のドイツにおける最も有力で高位の軍人になつていたかも知れない。彼はあの天才的革軍家ズィエモンの家系に属してゐたのだ。

クールで僕はシューマンの楽園と妖精を聴いて全く腹が立つた。

噫、感情の何たる恥ずべき柔弱化!そして何たる俗物的愚物がこの炭酸レモン水の湖の真中に酔つぱらつて居ることか。僕は逃げ出した——僕たちのヴェネツィアの作曲家の楽しい愉快なメロディーへの本當の憧れを抱きながら。ところで僕は彼に、彼の歌劇を売り込むための最後の試みをする様に説き勧めた——ビューロー(今はハンプルクのポリーニと契約している)にこの作を上演させるのだ。ビューローがそれをやらなければ、やる者は一人もない!それをやるためには身体の中に勇気を、矛盾さえも持つていなければならぬ。

誠実をもつて、

君のN

〔欄外に〕勿論僕が「断然最初の」客だ。月末に金が出たら、どうか何時もの様に書留で送ってくれ給え、ズィルス＝マリーアと書くだけで十分だ。奥さんに心からよろしく。

① 七六番の注①参照。

② サン・スイモン。フランスの社会思想家。一七六〇——一八二五。

③ オークストラ伴奏の合唱曲（一八四一——四三）。ニーチェが少年時代に好んだ曲である。

二七七、ニーチェより

ズィルス＝マリーア、一八八七年六月三〇日

親友よ、シュタインの死についての君の報せ（その後お父さんの方からも来たが）は僕にはこの上なく悲しかった、というよりもむしろ僕は今もってすっかり度を失っている。僕は彼が実に好きだった、彼は生きていただけで僕が嬉しい。僅かな人々に属していた。また僕は、彼が僕にとって、いわば後のために取って置かれていた人間だということを疑わなかった。何故なら、豊かであり深くて必然的に発展が遅いあの様な人間には多くの時間を与えなければならぬのだから。しかも彼にはそれが与えられずに終わった！どうして僕が彼の代りに召還されなかったのだろう——その方が意味があったろうに。しかし一切がこの様に無意味なのだ、そしてあの高貴な人間、僕が僕のワグナー関係によって見つけた人々全体の中で最も見事な種類の人間は、もはやいない！——

親友よ、君の手紙には深く感謝している、それが非常な不快状態

383

にも拘らず書かれたものであるだけに益々だ。殆ど同時に僕の「曙光」も君の手に入っていると思う、これに付けられた慎重ではあるが無難ではないかも知れない序文は君の注目に値すると思う。結局のところこの凡ては、僕たち兩名がもう体験することにはなるまいと思われる世代のためのものなのだ。大きな諸問題、僕がそれ等によって、そしてそれ等のためにまだ生きてることが確かであるにもせよそれ等に悩んでいる大きな諸問題が、その世代の中で肉体を具える様になり、行為と意志とに転じて行くに違いない。近いうちに、新しい「悦ばしき知識」も送らせて貰う。——

少し良くなったら直ぐにミュンヘンのロートプレッツ夫人へ二、三行書き送る積りだ。僕の健康は徐々にしか前進しない、しかも大體において停滞している、原因も本拠も僕には分らない何か或る深い心理学的障害が存在するのであって、そのおかげで平均的感情（生理学者の言うところでは「一般感情」）は絶えずゼロの点以下だ。——如何なる誇張もなしに言うが、僕はこの一年間に、精神と身体が新鮮で快適だった日が一日もなかった。この不調（昼も夜も）は、僕があのようにしばしば曝されてきた猛烈でひどく苦痛なあの危機状態よりも悪質だ。——カルルスバートは全然効かなかった、そもそも僕の場合には胃は常に全く間接的にしか関与していないのであり、決して第一原因 *Causa prima* ではないのだ。

最後に奥さんへのお願いを一つ。三ヶ月このかた、僕に効くお茶が切れている。僕が信用しており僕の場合には証明済みの唯一のお茶は、パーゼルでも買える英国茶ホーニマンなのだ（——僕はそれ

を当時、中央広場に面した店で買った。一キロ入りのブリキ罐がある、十二フランの値段で。その様な罐を送ってくれることをお願い出来るだろうか？包装は疑いなく店自身が引き受けてくれる。——このお茶は特に上等なものではないが、それは絶対に変らないのだ（四〇年この方）、従って普通買われているあらゆるお茶の様に試作品ではないのだ。

君の回復を切に願いつつ、変らぬ誠実をもって

君のニーチェ

二七八、オーヴェルベックより

バーゼル、八七年七月四日

親友よ、僕のフラウは土曜日に八軒の店、中央広場に面した店は二軒、を回った、何処にもお望みのお茶はなかった、大抵の店ではそれを全然知っていなかった、知っていた店でもそれは少なくとも今は当地ではもう手に入らないと主張していた。それでも僕は、無論全くおほろげにだが、決してそう昔ではない頃に町を歩いていたら、或いは若しかすると繰返し何処かで、ホーニマンという名前の付いたブリキ罐をちらっと眼前に見た様な記憶を持っている。君自身は注文先の詳しい記憶はもうないだろうね。何れにしてもフラウはまだ尋ね回ることを諦めてはおらず、今日ももう一度出掛ける、若し堪え難い暑さが余りにも彼女に辛いというほどにならなければ、僕自身は残念ながらもまだ十分動けるまでには回復していかない、ずっと良くはなっているけれど。今日は車で初めてまた講義に出掛け、

385

真っ直ぐに帰宅する。思い掛けなく早かったこの回復も、僕が今用いている海塩風呂のおかげだと思ふ、そしてこれさえ用いていれば、他の治療を僕はやらなくてもよいのではなからうかと思ひ始めている位だ。医者もそれでは駄目だという様子を見せてはいない。家に浴室があるのでこの方式には至極都合が良い。今はリューマチは胃ほどに荷厄介ではなくなっている。最も単純な働きさえしようとしないうの弱さは、もう何週間も前からひどくなる一方で、流石の僕も本当に意気消沈だ。少なくとも今までのところでは、カルルスバートの塩は僕にもまだ効果がなかった。

序文付きの曙光を本当に有難う！親友よ、君から送られてくるこれ等のものは、益々受取人の値打とは全く釣り合わなくなるばかりだ。僕はまだ全然君の水中尺度を当てることをしていないのだ、僕は自分を君の数々の深みへとこれ等が要求する通りに沈めることが出来ないかと告白しておこう。僕がまだ何かを自分で仕上げることを全面的に放棄してはならないとすれば、僕はこれ等から或る程度離れていなければならぬ。けれども、君の事柄の作用から道徳的に身を守ろうとか、特に、僕がそれに対して感謝しなければならぬ義務から身を守ろうとかいう欲求ほどに僕から遠いものはない。それどころか、生まれてくる限りにおいて僕が今後も生み出して行くであろうと思われる極めて平凡でつましい文献的研究は若し君がいなければ生まれてきはしなかったであろうという意識は、僕にとって一つの喜びなのだ。しかしながら僕の場合には実にばつとしないこの様な反響のみに留まらざるを得ない。君の文章や小論文に接

386

するたび毎に僕が与えられ、今度の序文を読んだ際にもまた与えられた全くの贅沢な喜びについては、勿論僕は何も言わないでおく。或る意味で君は確かに未来の諸問題を掘り当てている、何れにしても僕が何時も君のために期待しているのは、その人自身の曙光の輝きを君が本当に認めることの出来る様なあれこれの読者が君に与えられることだ。——差し当って願わしいのは君の今の不調から君が早く良くなることだ。最近熱帯的な毎日なので、高地にいる君が兎に角羨ましい。フラウがくれぐれもよろしくとのこと。君の誠実な

F・オーヴェルベック

二七九、ニーチェより

〔葉書、消印はズィルス・エンガディーン、八七年七月六日〕

親友よ、お茶のための骨折りには幾重にもお許しを乞う。その後偶然にホーニマン茶のルツェルンの住所が僕の眼に入った、だからもう二、三日待ってからそこへ問い合せる積りだ。健康は前進中と見受けられる、最近二回発作があったけれど。——今僕はワイマルの官文庫顧問ブルクハルトからの通知と問合せを受けたのだが、それ等から判明するのは、滑稽にもゲーテ研究が僕の一家の歴史まで囓っていることだ、つまりゲーテ研究はこんなことを見付け出したのだ、若き詩人と親しんだあの「ムートゲン」(一七七八年頃)が僕の父方の祖母エールトムーテ・ドロテア・クラウゼ、即ち、ワイマルの教区総監督としてヘルダーの後任になったケーニヒスベル

クの神学教授クラウゼの姉妹^①でアイレンブルクの教区監督ルートウイヒ・ニーチェ博士(僕の祖父)の後妻になった女性に他ならないというのだ。君と奥さんとに感謝しつつ

君のN

① ブルクハルト氏はムートゲンをクラウゼ教授(一七七〇——一八二〇)の「姉」と考えたのであろう。

二八〇、ニーチェより

ズィルス||マリア、日曜〔八七年七月〕

親友よ、「教父」としての君に一つのお願いだ——テルトウリアーヌスの或る箇所がどうしても入用だ、その箇所での立派な魂の人物は、彼が「彼岸」において彼の敵たる反クリスト教的な人たちの拷問の苦しみを眺めながら享受する筈の喜びを前以て描いており、その拷問は実に皮肉的且つ悪意的なやり方でそれ等の敵どもの以前の職業の種類をそれとなく示す様に特殊化されているのだ。この箇所を君は思い出すことが可能だろうか?そしてそれを僕に送ってくれることが? (原文デ *originaliter* 或いは翻訳したもの)。つまり僕はそれがドイツ語で必要なのだ。

最近の何通もの葉書には本当に感謝している、その中の「赤面」の語は僕を感動させた、あの幾つかの序文に対する君の関心が僕を喜ばせた様に。近日中に悦ばしき知識を受け取ることを君は免れるわけには行かない。敬虔さの中に気を落着けるべし、危険はそれで終りだ——そして君は何処かの涼しい山の上で、この種の「知識」

を腹に入れるためのちょっとした時間と場所を見付けるのではなからうか。

一昨日は僕の英国とロシアの婦人たちを訪問した、彼女たちは今年にはマローヤ^①にいる——僕たちは朗らかに心から融け合った。それはそうと、そのホテルは感じよく贅沢なものだった。また、僕のために小音楽会が「サーヴィス」された——非常に有能で上品なオランダ人が演奏した（グリーク、イエンゼン、バルズィファルを）。

昨日はウェールテマン夫人に頼んでパーゼルの例の「お嬢さん」マリー・ワルターの店宛てにウェストファーレン産のハムの注文を出して貰った。

僕のこの前の葉書のための追伸。僕はあの感心な官文庫顧問兼ゲート研究家に（僕の母を通じて）次の様に報せてやることよって彼を見事に驚かせた、即ち、一七七八年に「ムートゲン」が若き詩人と親しんだというのは本当ではないであろう——「ムートゲン」がその年の十二月に生まれたという事情があるから、と。彼は不運にも彼の「発見」を既に印刷させてしまっていた——それでもまだ、ゲートの日記のムートゲンが僕の祖母の母であるという可能性は残っている。序でながら、「ゲート家」との関係は、何れにせよ確実だ。また、ヘルダーの後任としてクラウゼ教授を招聘したのはゲートのやったことだ。

君と奥さんのお元気を心から願いつつ、

君のニーチェ

① ズィルス湖の西南端、即ちズィルス・マリーアの反対側にある保養地。

二八一、ニーチェより

ズィルス——マリーア、一八八七年八月三〇日

親友よ、夏は去った。僕たちは既に二日間全く雪に降り籠められていたことさえあった、その後は清々しく、そして寒さはきびしくなったが、僕の健康にとってこれ以上望めないほどに良く晴れている。寒さは僕の敵ではない。

僕は君のことをしばしば考えた、特に、君が大いに過ごし辛かったであろうと思われる君のドレーズデン滞在についてだ。^①今は君はどこかの高処にいて、晩夏の気分にいると思う。苦しい印象から少しく回復していればいいのだが。君の名前をこの夏にこの高地で僕には実にしばしば口に出した、何故ならパーゼルが今回は最も長い期間ズィルスの支配的構成分子だったのだ、——即ち三六の頭数によって代表されて。良きパーゼルの人たちの僕に対する態度は全く変わっておらず、実にねんごろで実に丁重であって、僕がそれ以上望めない位だった。ラ・ロシュ、リュエヒナー、アリオート等々の名前が最初は僕の頭を若干じんじんさせたが、次第に僕の記憶が甦ってきた。特に、以前のザリ・フィシャー^②はずっと僕に対して素敵な応接ぶりを示した（彼女の子供のマンフレート、エレオノーラ、ズィーグスマントと共に。僕たちはこれ等の素晴らしい名前のことで笑った）。アンドレーアス・ホイスラーの妹さんも同様だった。——それからフォン・ザーリス嬢がここにいる、今は歴史学の博士（論文はハインリヒ四世の母アグネス・フォン・プワトウに関するもの）だ、女友達のキューム教授の娘さんと一緒に住んでいる。終りに、

エルランゲンの数学教授のネーターという分別のあるユダヤ人や家族連れのライプツィヒ最高裁判事ウィーナー老博士と折に触れての交わりがあった。(後者も若しかすると若干ユダヤ系かも?) 僕の英国とロシアの婦人たちがマローヤから僕を訪ねてきた。フィン嬢はそこでの仮装舞踏会で第一等の成績 *succès* を得た(新聞によつてさえ)、即ちロシアの宮中女官及びロシアの農婦として。しかし老マンズローフ嬢の具合は余り良くない。或る日、白髪の老紳士がその夫人と一緒に僕に挨拶をした、エルランゲンのクラス教授(「哲学者」)だった、彼の最初の言葉は、「おお、何と親切に貴方は私を試験して下さったことか? そのことを私は決して忘れないでしょう」というのだった(——彼は当時バーゼルで学位を獲得したので)。

まだ君にテルトウリアヌスのあの箇所に対するお礼を述べていなかった【三八七頁二五行目以下を参照せよ。オーヴェルベックの返事は保存されていない。観覧席ノ中デ、二九章 *De spectaculis* cap. 29 は大オクターフ版ニーチェ全集第七卷三三三頁以下に使われている。二五行目の「或る論文」と三九一頁一四行目の「三論文」とは何れも「道徳の系譜」を指している】、君が付けてくれた注釈を全く遠慮なしに使用させて貰った(つまり、現在印刷中の或る論文で)、あの箇所の一部は君の手紙が到着する前に僕の書類の中に見付かっていたのだが、それを省略ナシ *in extenso* 入手出来て実に有難かった。——「彼岸」の販売の結果は大いに教訓になった。今回は、老練であり人気のある出版業者が一つの書物のために為し得る限りのことをやったのだ。諸雑誌の編集者たちへ六〇部ほどの

献本を分配することも行なわれた。それにも拘らず決算は悲惨なもので、売れたのは文字通り一〇六部、その他は凡て返品された。編集者の中で送付物に注意を払ってくれたのは五分の一あるかなしだ。僕が出す凡てのものに対する嫌悪と原則的拒否との確実な徴証が幾つもある。そして、問題になる様な批評は一つもない! とところで僕は不満な気持でこのことを言っているのではない、何故なら僕にはその訳が分っているのだから。それでも、この「彼岸」を僕自身が少々助けてやるのが不可欠と思われた。そういう次第で僕は三論文の形で同書の問題をもう一度精確に示すために二、三週間を使った。これで僕は、僕の従来の著作を「分り易く」するための努力は終ったと思っている、そして今後何年もの間もはや何も印刷しない、

——僕は絶対に僕自身の瞑想へとひっこんで、僕の木から最後の果実を振り落とすことの許される時期を待たなければならぬ。体験を全く持たないこと、外部からの何物をも、新しい何物をも——これが今は当分の間僕の唯一の望みだ。——九月二〇日に僕は僕たちのけなげなケーゼリッツをまた元気づけてやるためにヴェネツィアへ発つ積りだ。彼は重たい夏を過ごしたのだ。

テース氏がジュネーヴから実に親切な便りをくれた。(彼に關してローデはこの春僕に或る無作法を働いた、そして僕はこっぴどい返事を出した、こっぴど過ぎたかも知れない。後で僕は悔んだ。) ヨハネス・ブラームス博士が僕の諸著にこの上なく強い関心を持っているということを報せてくれた人がいる——(健康は厳格極まる撰生のもつて例年よりも良い。全くひどい発作の日は全体で *5. summer* 391

六日だった。僕はズイルスを固執する。試みる暇がもう無い——そして見つけ得るといふ信念がもう無い……奥さんと奥さんの御家族に呉々もよろしく。(ミュンヒェンの結婚式の通知が美しいカードで僕のところへ来た。)

誠実と感謝をもって、君の

N

① 八月初めから九月半ばまでオーヴェルベックは父の病氣のためにドレーズデン及びその付近のクライン・チャハウイツに滞在した。夫人は彼女の実家の人たちと共に上部バイエルンのミッテンワルトへ避暑に出掛けていた。

② 人名索引で分る様に、アリオート夫人になった人である。娘時代のザリ・フィシャーに触れている家族宛ニーチェ書簡三通(いずれも一八七三年のもの)が、「母と妹への書簡集」に載っている。

③ 「道徳の系譜」第一論文第一五節。

④ ロートブレック夫人の娘(つまりオーヴェルベック夫人の妹)マリアアの結婚式。八七年七月二四日に行なわれた(ガスト宛ニーチェ書簡二二三番参照)。

二八二、オーヴェルベックより

ドレーズデン付近のクライン・チャハウイツ

一八八七年九月九日

親友よ、最近ミュンヒェン及びミッテンワルト経由で受け取った君の夏についてのお報せに対するお礼をどうしてもズイルス——マリアに君がいるうちに届けたい、そうとあれば今日は書かなくちゃならない、来週では少なくともそれが難しくなるだろうから。今日は一時凌ぎの便りしか書けないことは確かだ。何故なら明日僕は僕の身内の者たちと一緒に町へ移るのだが、僕の哀れな父の状態のた

めに移転は色々と面倒だからだ。僕は八月二日以来ここにいて——クライン・チャハウイツはビルニッツの対岸にあると言えば、君に教えたことになるかも知れない——そして君が親切に同情しながら察してくれている様に実に悲しい気持ちで暮している、ただし僕がもう「どこかの高処に」いるのではないかと考えたりしては間違いだ。僕は如何なる点においてもその様な場所にはいない、そしてそう直ぐにはその様な場所へ登って行くこともないだろう。この地で僕は妹が移転するのを手伝い、さらに、町を去る時はまだ殆ど完全に物が分っていた僕の父に対して町の住居への帰還が及ぼす印象を二、三日観察し、そして、僕たちが毎日計算に入れていなければならぬ色々な事故が起こらなければ、次の火曜にフラウをミュンヒェンに迎えるに行く積りだ、フラウの方も明日バイエルン高地のミッテンワルトを離れてくるのだ。それから大急ぎでパーゼルへ帰り、出来れば僕はさらに僕のリューマチのためにラインフェルデンで日光浴療法を受けようと思っている、しかし何よりも先ずスコラ学の歴史についての僕の新しい講義に着手せねばならない、これのことを考えると僕は今から眼の前がくらくらする。何故ならこの地では多くの理由から準備のことを考えるわけに行かなかったからだ。一番悲しいのは、僕がやってきた時から何の進展も見られないままにこの事態を後にせねばならないことだ。近頃の父には少なくとも苦痛はなかった、しかしこれ等の日目の前段階として春には苦痛が続いたのだ。今の彼には生存からの速やかで安らかな救済のみが望まれるのだが、速やかであるということに対してさえ医者たちは、父の年齢からし

て大抵そうなるだろうとは考えながらも保証を与えてくれない。彼の精神は最も厳密な意味で決定的な点を支配しているに過ぎない——従って例えば彼は少なくとも子供である僕たちと孫たちだけは常に見分けがつく、孫たちの中の二人は孤児になったので彼が引き取っているのだ——それ以外の彼の考えは、如何なる結合も不可能になったかの様な恐るべき混乱に陥っている、しかし本来的な働きをしていることも稀にはある。この様な状況下では、行くも留まるも等しく辛い。留まるのも辛かろうと思われるのは、本質的には何にもならないからだ、そして町へ引き移りさえすれば、唯一つ残されている親切な世話をするのに都合が良いからだ。僕の妹にとって僕は最近では、いないと困る人間だった、普段は役立たずの傍觀者だが。——さてパーゼルへ帰れば君について繰返し耳にすることと思う。君の彼岸についてのドイチツェ・ルントシャウ誌でのギツイキーの批評を知っているだろうね。あれを読んだ時に僕が驚いたのは、その実質のなさだけだった、筆者が現代の大学教授であることを考えれば実によく理解出来る嫌悪の表現においてもだ。一体ローデの「テーヌに関する無作法」というのは何なのだろうか？僕にはそんなことは全然見当がつかない。この夏には彼から一度だけ便りがあった、彼は胃の不快感を大いに嘆いていた、これは、彼が春に僕たちを訪ねてきた時にはまた良くなっていた様に見えたのだが。数日前にプフルーク||ハルトウングの婚姻通知を受け取った。彼が君にも一年前に彼の意図を話さなかったことは不思議な気がする。遂にその陰謀はうまく行った、しかもベルリンにおいて。——ヴェネ

394

ツィアへの君の旅が無事であらんことを心から祈る、そして冬が君を、夏について述べているのと少なくとも同じ位に満足させてくれることを。月末には送金に関する君の指示があるものと思っっている。同じ時期に僕は、残念ながら当籤して今期限りとなった君のパーゼル債券の中の一枚をさらに投資する世話をせねばならない(一〇〇〇フラン)。この点で何か考えがあれば、それも一緒に報せてくれ給え。僕の妹が君の挨拶に対し心から感謝している。
いつも君に誠実な

F・オーヴェルベック

二八三、ニーチェより

ズィルス||マリーア、一八八七年九月一七日

親友よ、多分君はもうパーゼルにいるだろう、そしてもう再び仕事に没頭しているかも知れない。仕事は君には一種の幸福だろうね、君にとって非常に苦しい否応なしの印象を伴っていたこの夏の後だからね。僕は君の報せを強く心を動かされながら読んだ。——

これが、ズィルスで僕が書く最後の手紙だ。何故なら出発が迫っているから。次の宛先は最近既に触れた様に、ヴェネツィア、局留だ。金は約半分をイタリア紙幣(残りはフランス)で受け取れる様なら有難い(一番いいのは一枚のイタリアの五〇〇フラン札と一枚の同額のフランス札だ。部厚い郵便は疑念を生じさせる)。僕の意図は、約二ヶ月ヴェネツィアに滞在することだ(そしてその図書館を僕の関心に照らして一度吟味してみることだ)。しかしその後また

395

ニースを訪れようと思つている。「気候、空の輝き、空気の乾燥」の問題は今年もまた、根本的重要性をもつて僕の記憶に刻み込まれた。僕は新しい場所を実験することはまだ許されていない。(いずれは、僕の研究上の理由から、大きな大学のそばに滞在することがどうしても必要だ。恐らくライプツィヒだ、そこには僕への好意が断然一番多く存在している。内緒だが、あの無作法者ローデがそこに落着かなかつたことを僕は喜んでゐる……)

僕の健康は僕のこの前の手紙以来再びはつきりと後退しつつある。早い秋(圧倒的悪天候を伴つている)は僕をひどく苦しめた。

抽籤で債券が戻ってくるという偶然は僕にとって不都合ではない、何故なら僕は近いうちに(約一ヶ月半の後に)、僕の最近の出版費を払うために多額の金が必要から。序でだがこの著作(三論文を含む)で僕の準備作業は終結した。実際、僕の人生プログラムにあつた通りにだ、丁度良い時にだ、実にひどい障害と逆風とも拘らずだ。しかし勇敢なる者にとっては一切が利益になる。(上述の著「道徳の系譜。一つの論駁書」の従来唯一人の読者、以前からずっと僕の校正係であるケーゼリッツは、同封の手紙が示している様にと著者に非常な満足を感じている。)

ドイセン教授が、彼の小柄な夫人と一緒に、僕をここへ訪ねてきた。僕に対する愛着の心には感動した。ギリシャへの旅行の途次にだ。迂回してズィルスに寄つてくれたことは非常な好意だつた。序でながら、ショーペンハウアーを信奉する第一等の哲学教授だ、そして彼がその考え方に立ち到つたことに対して責任があるのは余人

ならざるこの僕だとのことだ。大イニ良シ *Va benissimo* / 僕が、一層の価値を置くのは、ドイセンがカントとショーペンハウアーとの準備の上に立つて印度哲学を内部から理解している第一等のヨーロッパの学者であることだ(——彼は印度哲学を「信じている」、そのためには実際ショーペンハウアーは必須の中間段階だつた)。彼は僕に印度哲学の最も精巧な作品、ヴェダーンタ *Vedanta* のストラス *Strass* を持つてきてくれた、これは彼が翻訳し大学の費用で印刷されたものだ。——

カルル・シュビッテラー氏については何か個人的なことを知つて

いるだろうか、彼は今バーゼルに住んでいる(ガルテン街四四番)。彼は僕に手紙をくれた。非常に繊細で興味ある頭脳を持ち主であることは疑いない。その他の点ではどんな風だろうか? 不機嫌な人の様に思われる。酒飲みかい? 僕は彼の美学上の論文のために出版者を探している(……僕自身のために出版者を見つけることは諦めた……)。君と奥さんとの好意を切に願ひつ

君の友

N

① 格言集。

二八四、ニーチェより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八七年九月二四日〕

親友よ、ヴェネツィアに到着した、現在の諸条件は今までの時よりも我慢出来る。空気も今は清澄軽快 *impida elastica* だ。旅行そ

のものは危険のないものではなかった(コモ湖上では嵐と雷)。僕たちの作曲家 *Massimo* は何時もより調子がいい様に見受けられる。新しく作った素晴らしい田園曲(オーケストラのための)は、完全性を楽しんで見事な落着きを示している、——それで僕は今は例の心配を沙汰 *Yamid acqua* にしている。——金は、ここへ三〇〇フランだけイタリア紙幣で送ってくれる方が僕には良さそうだ(残りは後でニースへ)。僕は一月二日頃までしかここにいないと思うから。(光が僕の眼をひどく疲らせる、ズィルス及びニースの光とは全く違った光だ、湿気のためだ)。「彼岸」に関する国民新聞(一八八六年二月四日)の優れた(しかし敵意のある)論文がここへきて初めて僕の眼に入った。

誠実をもって

君の N

〔欄外に〕住所、ヴェネツィア、司祭小路、一二六三(サン・マルコ)

二八五、オーヴェルベックより

バーゼル、八七年九月二七日

親友よ、お望みの三〇〇リラを同封する。残りは手許に置く。近日に籤で当たったバーゼル債券の利子と元金に加わる(一〇四〇フラン)。ところでこの全額を君の印刷費のために僕の手許に置くべきだろうか、せめて半分を直ぐに投資してはまずいのかね。君が僕に解約の全権を与えていたツェーリヒの州立銀行債券の解約が君に對

して通告されてきた、しかも今月五日が期限になっていた、それで、僕の不在のため二、三日分の利子が失われた。近く非常な金額が必要になるといふ報せを含んでいる君の手紙は、償還の時にはまだ着いていなかった。だから僕は元金を直ぐにまた五〇〇フランずつの二枚の中央鉄道債券に投資した(一八七六年の公債一三三〇三二及び三三番)。この大急ぎのなぐり書きを許し給え、君の最近のお報せに心から感謝している、ケーゼリッツに心からよろしく。

誠実をもって君のものなる

F・オーヴェルベック

二八六、ニーチェより

〔葉書、消印はヴェネツィア、八七年一月一七日〕

親友よ、僕のヴェネツィア滞在は終りだ、次の金曜にニースへ発つ。その僕の住所は再び、サン・エティエンヌ小路、ジュネーヴ館だ。願わくは地震のない一冬が与えられんことを。どうかこの宛先へ、まだ残っている七〇〇フランをフランス紙幣で送ってくれ給え。僕は今年に僕の金で間に合わせるために少々苦勞して、出来るだけ儉約する様に努めた。つまり毎日一フラン減らすこと——これが問題だった。それだからこそ今は新しい場所(ローマの如き)を試みようとはしないで、僕に分っている「ねぐら」へ向って「まっしぐら」だ。——古い友よ、君は大いに仕事に中だろかね? 僕の心からの挨拶を受けてくれ給え、そして奥さんによろしくお伝えあれ。(三〇〇フランのイタリア紙幣の送付にお礼を言うのを忘れた!) 少々

眼を病んでいる。

君のニーチェ

二八七、オーヴェルベックより

バーゼル、八七年一月二四日

親友よ、同封するのは、実に気の毒にも君が恐らく金曜以来、もしかすると不健全な状態を禁じ得ぬ状態を待っていると思われ七〇〇フランだ。少なくとも君の暗示によれば僕は、君が余り豊かとは言えない懐工合でニースに着いたものと考えざるを得ない。しかし君のこの前の葉書を受けてから今日まではフランスの紙幣を手に入れることが不可能だったのだ、それは何時も用意されているとは限らないのだ。ところで君はさらに一〇〇〇フラン余りを職工銀行に預けてあるのだが、それを僕は君の印刷費のために差し当りそこに置いたままにしておく。しかし君がこの金の可成りの部分或いは全部をその目的のために使わないで済むと思う場合には、直ぐ報せてくれ給え、一〇〇〇フランなり或いはせめて五〇〇フランなりをもっと有利に投資し直すために。

さて君は君のおなじみのニースへ戻り、前回地震でやられた君のおなじみの旅館にも忠実であったわけだ。その旅館はちゃんと再建されたのだと思う、そしてそれの方も今度は君にとってもっと信頼出来る宿泊所であってくれればいいと思う。ところで、君が冬になって新しい場所を試みていることを報されるよりも、少なくとも最初は、何と言っても色々と試験済みのおなじみの場所にいることを

報される方が僕は有難い、そして君が最近また嘆かざるを得なかった眼の悩みが早く去ることを心から願う。僕は僕のリューマチが本当に治っているのだからいいのだが、これに対しては時折かすかな不安が生じてくる。ちゃんとした治療のための暇が今回はなかった。明日はスコラ学についての僕の新しい講義を始める、そして最初に当って不吉にも僕を支配している印象は、混乱のうちに中世に踏み入って初めのうちは混乱を積み重ねていたヨーロッパ人がその混乱から再び抜け出し得たのは一体どうしてだったのだろうかという印象だ。僕自身が春には再び健康になって浮び上って、うまく結着をつけることが出来さえすればと思う。——最近是非常に急いで書いたので触れることが出来なかった問合せにも今日は答えておこう。シュピッターラについての問合せのことなのだが、勿論僕は僅かしか述べ得ない。彼は、バーゼルでの僕の最初の聴講者の一人である。その後数年間は半ば消息不明になって怪奇な風評においてのみここで生きていた人物と同一人物なのだと思う。プロメートルイスとエピメートルイスの著者或いはタンデムとしての彼は、君にも多分知られているだろう。その後彼はここの新聞グレンツポストの編集者の一人だった、同新聞が生きるのに窮シテ *aux expédients* いた時代であって、シュピッターラは論説や、時には、新聞しかもスイスの新聞のために余りにも才気煥発過ぎる詩を載せたが、助けにならないかったことは確かだ。彼はこの仕事もやめてしまった、少なくとも彼の名前は同新聞がバーゼル朝刊新聞に変貌する以前にもう消えていた、この変貌は六ヶ月前に行なわれたのであって、その折に僕は

同新聞を取るのをやめた、朝にそんなものがよきによぎと生えてくるのを見るのが特に煩わしかったからだ。シュビッターが今何をやっているのか僕は知らない、(——)、しかし何れはここで彼について他のことも耳にするだろうから、そうしたら報せる。彼が君に援助を乞うたりしたのであるか?——昨日は定期音楽会において、最近また明るみに出てきた、それどころか大評判になってきたワグナー交響曲が演奏された。僕は聴きたい気持は大いにあったけれど、やらねばならない仕事が多過ぎたので家にいなければならなかった、またの機会があるうと思う。同じ様な事情で今日はこれで終りにして左様ならを言わねばならない、最後に君の挨拶に対する僕のフラウの心からの感謝と返礼とを付け加える。

誠実をもって君のものなる

F・オーヴェルベック

君が別れた際のケーゼリッツはどんな様子だったかね?

二八八、ニーチェより

ニース、八七年十一月二日

ジュネーヴ館。

親友よ、君の誕生日に当って僕は既に若干の小さな贈り物を前以て送った、つまり生への讃歌〔欄外に。この讃歌は何時の日か「僕の思い出のために」歌われるためのものだ。言うなれば、僕の問題が何であったかが理解された暁の、百年後の今日あたりにだ。〕、それと最近の(そして当分は最後の)書〔道德の系譜〕だ。今日僕が付

け加えねばならないのは、差し迫っている君の年齢に対する(君の健康に対する、君のリューマチとの戦いに対する、そしてスコラ学との……)僕の願望だけではない。何よりも先ず、君が僕の生涯の最も苛酷にして不可解であった時代に示してくれた不変の誠実に対する僕の敬意と感謝との言葉だ。僕にとって一時期が終りを告げる様に思われる。回顧してみることが従来以上にふさわしい。十年の病氣、十年以上だ。しかも医者や薬が見付かる様な簡単な病氣ではない。何が僕を病氣にしたかを一体誰かが知っているだろうか?何が僕を何年もの間、死の近くに、そして死への欲求の中に拘留したかを?知っている者があるうとは思われない。R・ワグナーを除くならば、彼と共に僕を「理解する」ために千分の一の情熱と悩みとをもって僕を迎えた者さえ今までに一人もない。僕はそんな風に既に子供の時に独りぼっちだった、四四歳の今日でもそうだ。僕が過ごしてきたこの恐るべき十年は、独りぼっちであること、この程度にまで孤独化することが何を意味するかを僕にたつぷりと味わわせた。自分を守る手段さえ、自分を「弁護する」手段さえ持っていない一苦惱者の孤独化と無防備が何を意味するかを、だ。わが友オーヴェルベックを除けば(そしてさらに三人の者をも)、この十年間には、僕の知っている殆ど凡ての者が何らかの愚行を僕に加えた、それが怪しからぬ嫌疑であるにせよ、或いは少なくとも卑しむべき不遜の形式においてであるにせよ(最後にはローデまでもだ、この矯正し難い無作法者)。そのことは、その最良の点を挙げ

るならば、僕を一層独立的にした。しかしまた、僕を一層苛酷にし

たかも知れない、そして僕自身が望ましいと思う以上に人間侮蔑的にしたかも。幸いにして僕は、僕に關係する限りの他の一切の事柄と同じくこれ等の思い出をも折に触れて笑い草にするだけの快活な精神 *esprit gaillard* を持っている。そしてその上に僕は、自分のことを余り考えることを僕に許してくれない一つの課題を持つている（一つの課題、一つの運命、或いは何と名付けられても構わない）。この課題が僕を病気にしたのだ、これが僕をまた健康にもしてくれらるだろう、しかも健康にするばかりでなく、再び人々にもっと愛想良くなる様に、そしてそのための必要条件も備わる様にしてくれるだろう。

金は無事に手に入った、その前に何らの面倒に陥ることもなく。ニースとの僕の關係は今ではズィルス・マリーアとの關係と同じだ。僕はニースと和解する様に努めており、証明済みの良い諸要素を前景に置いている。ここの元気づけ晴れやかにしてくれる気候、みながる光（これが僕に許してくれる眼の使用は、他の土地での、特にドイツでの眼の働きとは全く比較にならない）。大いに改良され善意に満ちて未来を期待しているジュネーヴ館は、僕のために今度は本物の仕事部屋を作ってくれた（光と色を和らげることによってだ、これは僕にとって絶対的に重要だ）。小さなナトロン・カルボン・ストーヴがナウムブルクから僕のところへの途上にある。僕は下宿料を以前より若干多く払っている（二食つき下宿料一日五、五フラン。朝のお茶は自分でやる）。しかし、内緒の話だが、他の客は皆、もっと多く払っている（八乃至一〇フラン）。序でながら、僕の自尊心に

とっては一つの責苦だ!!

——何を僕が今自分に要求しているかを君は御存知だ、そのための僕の場所はニースとズィルス・マリーアであり続けるだろう（ヴェネツィアが幕あいた。僕はケーゼリッツには素晴らしい思い出を持っている。彼はあらゆる種類の幻滅にも拘らず彼の善良で高邁な魂を維持し得てきた、そして今は、もはや「古典的」という言葉でしか呼び様のない音楽を作っている。例えば或る交響曲の二つの楽節は、音楽において僕の知っている最も美しい「クロード・ロレン」だ。君と奥さんとが幸いな良き一日を過ごす様にと願いつつ、

君の N

〔欄外に〕ドイセン教授が君によろしくと述べている。彼はこの秋はアテネにいたのだ。僕は彼から、プラトンのアカデミーがあった場所でもぎった月桂樹と無花果との葉を送られた。

数週間のうちに新著の出版費に関する C・G・ナウマンの計算書が入ると思う、そしたら直ぐに報せる。

二八九、オーヴェルベックより

バーゼル、八七年一月二〇日

親友よ、僕自身が悪いのだから致し方ないのだがこの手紙を書き始める今日の僕は本当に辛い気持だ、つまり僕がすっかり忘れたまま過ごしてしまった事柄のためなのだ、僕がこの前に手紙を出した時よりも以前のことだ。君の誕生日を君は今回は僕の祝辞なしに祝ったのだ、そして僕自身は、僕の祝日に当たっての君の祝辞を手にして

初めてそのことに思い当たったのだ。君の讃歌は数週前に着いた、君の今度の手紙も数日前に、そして水曜には新しい著書もだ、これには、同書が誕生日の贈り物に定められていることをはっきり証しているナウマンのカードが添えられていた。しかも今日になって僕も僕がまだこれ等の凡てに対して一通の手紙によってさえちゃんとお礼を言うことが出来ない状態だということを告白するためにのみ手紙を書くのだ。丁度一〇月一五日の頃に僕は、僕の講義用の作業のために再び入り込んで今後数ヶ月間も抜け出られない苦しみの最初の燃え上がりの中にあつた。僕の心からの祝辞を受けずに新しい年齢に君を入らせる様な場合は、ひどい状態であるに違いないと考えてくれていいのだよ、そして上に述べた凡てのものが如何に僕を喜びで満たし感謝の気持にさせたかということをも君は疑いはしないだろう。開いて見た総譜は大いに僕をびっくりさせたけれどこの讃歌の中に直ちに僕がこの眼で見取つたのは古い友人だつた、そして非常に印象的で品位のある美しい歌が今や立派な衣裳をまとうて演奏されるために姿を現わしたのを見て嬉しかった。今度のテキストの中には勿論新しい部分が幾つもあった、例えば、最初の「苦惱」の上に置かれた見事な、またはや実に著しいアクセント、そして殆どそれ以上に僕の心に響く最後の拍子の和やかさ。しかし何よりも僕は、著書の場合にものだが君が再びこんな風に働いているのを知って嬉しかった、その際の君の深い喜びを気持よく納得しながらだ、その様な君を考えると僕の心は特に安らぐのだ。ケーゼリッツがカルルスルーエにおける讃歌の演奏を予告してきた、バー

ゼルにもこれへの関心を持たせるべきではないだろうか？君の現在の音楽は非常に素材である様に思われる。著書の方は今の僕としてはそれを直ぐに製本屋へ出す以外にどう仕様もなかった、そしてその後はそれはクリスマスまで一種の閉じ込め状態に置かれる。読むための時間をも一緒に送ってくれないことを君の本に対して非難するという様な気持ではない。僕は読み始めさえすれば良いのであり時間はあるのだ、ところが、読むためだけでなく、読んだ後に他のことを考えないだけの時間となるとね。矢張り贈り物が今回僕の手から奪われているのは当然のことなのだ、そして僕は今は僕を番犬として僕自身のそばに置かなければならないのだ。それで僕は今のところは序文をのぞき込んだだけであり、それが最近の幾つかの序文よりも君の読者層を広げるのに確かに適している様な印象を受けたのだがそれが当たっているかどうかは分らない、最近の序文は僕にはその様な目的のためには依然として余りにも世間離れしていて友人たちのために書かれたものである様に思われることが折々あつたのだ。——心から嬉しいのは、君がこの冬は書斎を持っていて、しかも暖房付きの部屋であることだ。段々と君はズィルス・マリールとニースを君にとって住み良くすることを考えねばならない、それ等の場所も段々と君に対してそれなりのことをする義務がある。この数週間の当地における生存は君には堪えられないだろう。当地は既に未聞の荒天の日日があつた、そして近頃は、特に今日はそうなのだが、「秋への信仰」を持つ者なら「はてさてこれからどうなることやら」と歌わぬまでも言いたくなる様な日日なのだ、即ち永遠の闇

が生ずるかも知れない様な。最近僕は、ローレンツから君のためにここへ送られてきた一冊の書物を新しい包装で君に送った、元の包装が実にひどい状態になっていたから。クリスト教の諸影響からのイスラム教の派生に関しての、既に言われたことのある考えではあるが面白い一つの考えがその中に含まれているということを僕は耳にしている。——僕の五〇歳の終りに当てもうちょっと暇が欲しかったと思っている、そしてドレーズデンからは相変らず実に心配になる報せを受けている。——フラウが心からよろしくと言っている。一切に対しての感謝を受けてくれ給え。

君の常に誠実な

F・オーヴェルベック

① 前から知っている歌という意味である。一八八二年夏にサロメ嬢が別れに当ってニーチェに与えた詩「生への祈り」(一五八番の手紙参照)のためにニーチェは当時作曲をしたのであったが、それはまだ「ピアノ伴奏つき」の歌の形式のものに過ぎなかった。八七年夏になってから、ガストの助力(というよりも殆ど凡てがガストの仕事だった)を得て「オーケストラ伴奏つきの合唱曲」としての「生への讃歌」を作り上げて印刷に付したのである。これがオーヴェルベックへ特別に発送されたことについては「ガスト宛書簡集」二三四番(八七年一〇月二十七日のもの)を参照のこと。

二九〇、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八七年十一月二三日〕

君のお便りと同時にストーヴが僕の部屋に入ってきた、それで僕はその後には感情の二重の暖かさを楽しむことが出来た。(ぎりぎりの時だった。天候はここでも度外れに不快で気をめいらせるものだった、

た、雪は降らなかったが大雨だった、殆ど十日間。一平方米の上に二〇ハリットルの雨量)僕は讃歌を、一通の手紙を添えて、君たちのところのフォルクランドに送った。君の方からも彼を、例の方針でちょっとつづいてみてくれるわけには行かないだろうか?ケルンとナウムブルクでも演奏が見込まれる。——ブルクハルトにも手紙を出した。たった今ズィーバーが「善悪の彼岸」と「道徳の系譜」との送付に対する感謝を述べてきた。

君と奥さんのお元気を祈る!

N

二九一、ニーチェより

〔葉書、消印はニース〕一八八七年二月二八日

今日は旧年から新年への移行に当っての祝賀の挨拶のみだ。冬はきびしい。それが君を苦しめているのではないかと恐れる、スコラ学と結託して……こちらは昨日から深い雪だ。僕にとっては新しいことであり、多くのニース人にとってさえた。しゅろは雪をかぶり黄色のオレンジが雪から顔をのぞかせ、その上方には信じられない様な空が喜びの余りに輝き渡っている——一切が実に幻想的で不条理だ。雪は粒状の堅い種類のものだ(この種類はここではコルシカ島ノ雪 *neige de Corse* と呼ばれている)。この状況下で僕は僕の小さなストーヴの故に僕自身を羨んでいる(これを僕は毎朝かきり六時にたぎつける)。何故なら僕の部屋は北側だからだ。他には伝えるべき良いことは余りない。僕の生存の重圧が再び強く僕にのしか

かっけてきている。全く良い日は殆ど一日もなかった。そして多くの心配と憂鬱。どうか君の誠実と愛とを僕に持ち続けてくれ給え、古い友よ！

N

金を例のやり方でお願ひする、書留で、ジュネーヴ館へ。

① ストローヴを手に入れて良かった良かったと一人で喜んでゐる気持を、面白い方で表現してゐるのである。

二九二、オーヴェルベックより

バーゼル、八八年一月二日

親友よ、土曜に君の葉書を受け取った時には金をいつもの様に両替することがもう不可能だった、金は約一週間前から君の指令のみを待っていたのだったが。今日もフランス紙幣では半分しか手に入らなかった。残りは明日まで待ってくれとのことだった。しかし長く待たせると君に不都合が生ずるかも知れないし、君のスイス人宿でなら損害なしにスイス紙幣も使えるのではないかと思うのだ。さらにまた、ニースでの両替が不利であるとは限らない。フランス紙幣二五〇フランを受け取るのに、ここでは六五セントの割増金を払わねばならなかった。さて遅ればせながら新年おめでとうを言わせて貰う。世は何処も随分暗い様だ、そして君のこの前の葉書を見ると、僕のおめでとうの言葉を受ける君も好調ではないかも知れないという不安を感じる。今は君も、新しいストローヴにも拘らず、寒さに悩まされていることだろう。少なくともこちらは寒さが一週間前

400

から非常なものだ。この休みは僕も本式の休養に使い過ぎてしまつて、最近では少々心配になりながら毎日を過ごしている。仕事の一部を中止し、運動を増やし、楽な暇つぶし仕事をしたりして、厄介な極な消化不良を大いに減退させることに忽ち成功した。しかし何時まで続くことやら？最大の痛恨事は、最近の止むを得ぬ養生生活の間にも君の系譜の検討を思う様には為し得なかったことだ。第一部だけしか実際には読めなかった、勿論すぐさま第一部の第一節が僕にとつてこの上なく恐ろしい導入部となつてゐることは僕の現状から推して君には察しがつくだろう。また僕は、普段ではちよつとなし位に、記述の一貫した最強音が気になつた。総じて、道德の功利的起原論に対する君の訂正は僕には良く納得出来た、しかし全体が歴史的観察法を取つてゐるにも拘らずその際の感情の激しいことが僕の腑におちなかつた。それから、歴史的に分析するならば第一五節で扱われている教父神学のこしらえ物でさえも余りに複雑な種類のものなのであるから、怨恨の幻像をかき立てる原因となつた現実を作り出した人々による支配が先行したのだという前提のもとにのみ「奴隷の蜂起」から導き出してくることには無理があると思われ。しかしこの点はこれだとどめて置こう。肝腎なのは、君の書が僕をこの数日間実に楽しませてくれたことなのだ、そして今から僕は、木曜にはまた講義が始まるので、自分の考えを別の方向にしっかりと向けねばならず、ペンを遮二無二また動かさねばならない。フォルクラントから何か便りがあったらどうか？僕は彼に殆ど会わな

いし、特に君のこの前の手紙以来は老B〔一〕^①の葬式の時にちよつと

口を交わしただけで、その時は、彼に尋ねてみようとの意図を実行に移す暇もなく直ぐに離れ離れになってしまった。老B〔一〕は約一月前に全く突然に亡くなったのだ、遺されたと言われている千四百万は今までのところ、ここの習慣である遺贈への振り向けの気配が全くないし『夫君の記念のためにその未亡人は非常に大きな絵画館の形で遺贈をバーゼル市に対して行なった』、特に大学へは一文も流れ込んでこない様だ。では、親友よ、元気で生きてくれ給え、フラウⅢも君のために佳き新年を、君の健康の向上と君の計画促進の元気を祈っている。

誠実をもって、君のものなる

F・オーヴェルベック

① 前年十一月二五日に死んだパッハオーフェン（一八一五—一八八七）である。

二九三、ニーチェより

〔葉書〕（ニス、一八八八年一月四日）

お便りと金が無事に着いた、有難うノ本について一言だけ。道徳というあの複雑なこしらえ物のさまざまな発生源をわざと絶縁したのは、明瞭さのために必要だったのだ。三論文のそれぞれが、別々の起動点 *primum mobile* を表わしているのだが、第四のもの、第五のものが欠けており、さらに最も本質的なもの（「畜群本能」）さえも欠けている——これは今のところは、余りにも大きな問題だから傍へ置かねばならなかった。色々な要素の凡てを最終的に合算

し、そして道徳に一種の決着をつけることもだ。このことのために僕たちは僕の哲学の、まだ「序曲」の段階にいるわけだ。（各論文がクリスト教の発生に関して寄与している。この問題をたった一つの心理学的カテゴリーによって明らかにしようとは毛頭考えていない。）しかし何のために僕はこんなことを書いているのだろうか？こんなことは君と僕との間では全く分り切っていることだ。

誠実と感謝をもって

君のN

ニス、一八八八年一月四日

二九四、ニーチェより

ニス、一八八八年二月三日

親友よ、C・G・ナウマン氏の計算書がやっと着いた。これを、このために預けてある金で払ってくれる様にお願ひしてもいいかね？急ぐことはないのだ。君の仕事の三昧境をこんな頼みで妨げることを心苦しく思っている。——

僕も大いに仕事中だ。今僕の前にある全く疑いなく巨大な課題の輪郭が益々はっきりと霧の中から現われてくる。ところで、暗鬱な折々があったのだ、どうやって生きていたら良いのかも分らなくなり、いまだかつて経験したことのない様などす黒い絶望に四六時中捉えられていた日が続いた。それでも僕は、自分が後へも、右へも、左へも逃れ得ないことを知っている、僕には選擧の余地が全然ないので。この論理のみが今や僕を支えて真っ直ぐに立たせているので

あつて、他のどの面から見ても僕の状態は維持不可能なものであり、拷問と言へるほどに苦しい。僕の最近著はそれを洩らしている。折れんばかりに引きしぼられた弓の様な状態にあつては、強いものでありさえすればどんな激情でも快く感じられるのだ。今となつては、僕から「美しいもの」を期待することは出来ない。苦しみ飢えていゝ動物からは上品に獲物を引き裂くことを期待し得ないのと同じことだ。実際に元氣づけ癒やしてくれる人間的な愛情の長年の欠如、人々とのほんのちよつとの関係が何れも負傷の原因にならざるを得ぬ馬鹿馬鹿しいほどの孤独化、これ等凡ては最悪のものであつて、唯一つの権利、必然的であるという権利を持つのみだ。――

もっと増しなことが書けないものか？畏敬と深い感謝との嬉しい証拠が何人もの芸術家たちからやってきたよ。その中にはブラームス博士、H・フォン・ビューロー、フックス博士、そしてモットルがいる。同様に、才気に富んで勇敢なデンマーク人G・ブランドス博士も心服の手紙を次々と書いてよこした。彼の表現によれば、僕の諸著から彼に向つて吹きつける根源的な新しい精神に驚嘆しており、彼はこの精神の傾向を「貴族的急進主義」と言い表わしている。彼は僕をドイツの断然第一番の著述家と呼んでいる。――

ゲルスドルフが僕たちとの関係を申し分なく根本的且つ誠実なやり方で回復したことは、もう書いたと思うが？同じことをローデに關して報せることが出来ないのは残念だ。彼を和らげ、以前のやり過ぎを忘れさせようと心から願ひながら書いた二通の手紙に彼は返事をくれなかつた。最近著の贈呈に対してだ。これは彼にとって

名譽なことではない、しかし彼は病氣なのだろう、調子が悪いのだろうか。――パラグアイについては大いに安心なニュースが入っている。もともと冒険と言へるこの企て全体の進み具合は輝かしいとしか言ひ様がないほどだ。新植民地では約百人の人たちがもう働いてゐる。その中には非常に立派なドイツ人家族も若干混つてゐる（例えばメクレンブルクのマルツァーン男爵一家）。僕の親族はパラグアイの最大の土地所有者の中に入つてゐる、フェルスター博士の勢力は、全く間接的そして偶然に僕の耳に入つたのだが、共和国の次期大統領になる見込が全くないわけではないほどに大きなものになつてゐる。彼（「フェルスター博士」と僕とがお互いを直接に敵として扱わない様にと無類の努力をしなければならぬことは、君には見当がつくだろう……反ユダヤ主義の雑誌が僕に猛然と襲いかかつてくる（――このことは、今までのお目こぼしよりも百倍も僕の心に適う）。今日はこれまで！

君も奥さんもお元氣で

君のN

二九五、ニーチェより

ニス、一八八八年二月二二日

親友よ、君がそんな理由のために（「オーヴェルベックの父が死んだのである。四一五頁参照。」）ドイツへ旅行せねばならなかつたことを知つて僕は全く暗然たる想いだ。ただでも暗い冬が、君にそんな打撃と痛みまでも与へたとはいへず、それでも君が報せてくれた一切から

判断すれば、今回の場合は本当の救いだったのであり、それも早過ぎたというよりむしろ遅過ぎたのだと考えざるを得ない。何か元氣の出る良いことが償いとして君にやってきて君の傷を癒やしてくれる様に僕は心から願う。それに、君は独りぼっちではない。隠遁者がそんなことにならざらたらどうしてよいか分らぬだろうと考えると僕は恐ろしくなる。

僕自身については今日のところは、また調子が良くなっていること、この前の手紙を書いた頃の苦しい緊張と憂鬱は克服されたらしいことをお報せするだけに留めておこう。差し当って僕は、君が驚くだろうと思うが、サン・レモ^①についての情報にすっかり心を奪われている。この情報は、或る奇妙な偶然から、僕のところには新聞社に入るのとは全然違った風に入ってくるのだ（それで僕は、この恐ろしい、そして全部伝えるわけには行かない出来事の最も内密な部分 *intima intimissima* を知っているのだ）。この場合も救いは近くにあるかも知れない。

心から哀悼しつつ

君の友ニイチエ

① ウィルヘルム一世が重態なのに、サン・レモ滞在中の皇太子が喉頭疾患でなかなか帰国出来なかった事件。八八年三月五日と三月二〇日との母宛ニイチエ書簡参照。

二九六、オーヴェルベックより

バーゼル、八八年三月一日

親友よ、最近寄せてくれた思いやりの言葉に心から感謝する。親

父を僕はもはや見なかった。僕自身の健康が埋葬の場に出ることを僕に殆ど許さなかったのだ。遂に死の神は、親父が数ヶ月前から断ち切りたいと望んでいた彼の生命を実に柔らかな手で取り上げてくれたのだ。悪性のカタルに悩みながら危険極まる天候の時に出発した僕だったが、不思議にも帰る時には癒っていた。——ところで僕は、悲しいかな胃が絶えず暴動を起こすのに、今後二、三週間は仕事で一杯なのだ、それで今日は、同封の計算書がどういうものなのか、そしてこれを僕がこちらから支払うべきかどうかを尋ねるだけにしておきたい、これを払うだけの金は僕の手許にあるがね。また、月末に入る取入をどうすればよいかを直ぐ報せてくれ給え。——特に南方にもしげしげと立ち寄っている今回の冬に対して君が愛用のストーヴを所有していることは本当に幸いだ。フラウからもいつも君のものなる

F・オーヴェルベック

二九七、ニイチエより

(ニース、ジュネーヴ館、一八八八年三月三日)

親友よ、濟まないことだが、お便りを貰って直ぐまた僕のことでも君を煩わせなければならぬ。「——」の計算書は全く疑わしい、僕は唯一つの項目しか是認出来ない。最初の六つの項目はこの前ライプツィヒを發つ時に支払った、七番目と八番目(ディオニスイオスとアポロドーロス)は受け取っていないし、欲しいと言った

ことさえない。しかしこのことについては僕自身が「――」と交渉しよう。――

ところで心配なのは、C・G・ナウマンのところでの僕の出版費用の支払いについて君が今まで何も報せてくれないことだ。計算書は前の前の手紙に同封した。――計算書を入れたその手紙が行方不明になったのじゃないかしら？――なだれと鉄道事故の多いこの冬は、不明になる物品が多いらしい……

C・G・ナウマンが金の受領を報せてよこさないのが、何週も前から気になっているのだ。――

「系譜」の印刷費は、五八八マルク六五プフェニヒだった。

月末に入る収入についてだが、それをここへ送ってくれ給え。しかし、着くのが一日でも早ければ早いほど有難い。本当のところは、僕がニースにいてもよい時期は過ぎ去っているのだ――陽光が（寒い日でも）今ではもう僕の眼には強過ぎる。――それ以外は、まあ具合がいい。そして、極端な諸問題とその解決とにすっかり捧げられた僕の冬には大いに満足している。――簡単にパーゼル紙幣だけで送ってくれ給え。――ストーヴは不可欠 *de rigueur* だった、

君の言う通りだ。特に僕の北向き部屋ではね。それにしても僕には、自分が北国の冬に堪え得るだろうとは絶対に思えない。如何に僕が、実につまらぬあれこれの理由のために、それを望まねばならないにしてもだ。なにしろここでさえ、太陽のない実に暗い冬日は僕には全くの拷問なのだ。僕は病み、殆ど信じられぬほどに打ちひしがれている、肉体的にも精神的にも。これほど馬鹿げた従属性は屈辱的

と言える。しかしどうにも仕様がな、僕はこのファクターを計算に入れなければならない。エンガディーンとニースは本来的にはもう疑いをはさむに及ばない、この二つだけは証明済みだ。僕は春が恐ろしい。春は今迄のところ何処へ行っても失敗だった。――頭と

神経が必ず弱くなり苛立ち易くなって、ほんのちょっとした偶然の事故を本物の大惨事にしてしまうという具合であった今までの十年は、僕の記憶からさっさと消えてなくなればいいのだ。しかし目下は、それを忘れていいる何日かが、何週かがあることだけで満足していなければならぬ。僕の考え方の全体にとって余りにもふさわしからぬこれほどの人間的老朽ぶりは僕の誇りを少々傷つけた、このことは認めざるを得ない。まずいことだけれど、こういう犠牲を払ってしか悲惨に堪えられないのだ。――僕は、光というものを信ずるのが容易でない氷河期穴居人の様な気持だ。極端に疑い深くなる、偏屈になる。

親友よ、今年またパーゼルの君を訪れる可能性なきにしもあらずだ、今はまだ約束するわけには行かないがね。

君と奥さんのお元気を心から願いつつ、君の

ニーチエ

ニース、ジュネーヴ館、一八八八年三月三日。（サン・エティエンヌ小路の名前が変って、今はロッスィーニ街だ。）

二九八、ニーチェより

〔葉書〕 ニース、一八八八年三月二二日

親友よ、冬の再来が今後に対する僕の考えを変えさせた。特に、スイス旅行はまだ暫くは僕に許されていない様だ。そういうわけなので、入る筈の収入の一部をイタリア紙幣で送って貰えないだろうか（三〇〇フランほど）。

家がまた売られたという君の報せは僕を本当にびっくりさせた。

一体君は、まだ正体の分らない特別なデーモンに魅入られているのだろうか、パーゼルノ未知ノ神 *deus ignotus Basiliensis* とでも言うべきものに？君と奥さんを本当に気の毒に思うよ。

N

（健康はまた下り坂。）

「――」は計算書を取り消し、大いに詫びてきた。――

二九九、ニーチェより

トリリーノ（イタリア）局留。

一八八八年四月一〇日。

親友よ、君のちょっとした南行きが悪天候を逃れ得なかったことは残念だ。殆ど何処もひどかった筈だ。僕も大いに悩まされた。ニースからトリリーノまでの旅行は、大したものではなさそうに見えるが、僕が今までやったうちの一番情ない旅行だったのではなからうか。途中ですっかり参ってしまったって、僕は万事とんちんかんなやり方をした。僕は一人旅なんかもうやっては駄目なのだということが、

眼ニョッテ *ad oculus*（――そして悲しいかな財布ニョッテ *ad*

saccum も）証明された。結局は二日間恐ろしい状態で病臥した――

何処でだと思おう？サンピ・ディ・アレーナでだ！僕はトリリーノ行きの切符を持っていたのに！ところがだ、一つの列車から別の列車に換える時に間違っただけに乗ってしまったのだ……

トランクは感心にも旅行の根本思想を堅持した。携帯手荷物がばらばらになってしまっていた。それでそれを電報で寄せ集めるのに苦労した。――トリリーノは、とくと考えた拳句の試みなのだ。僕の希望は、ここに六月初めまで留まって、それからエンガディンへ直行することだ。――

この町は言い様のないほど僕の気に入る。トリリーノは僕が好きな唯一の大都会だ。何か或る落着いた、そして取り残された様な感じが、僕の本能に快いのだ。僕は品位ある街路を恍惚となりながら歩く。何処にこんな舗道があらうか！足にとっては極楽だ、僕の眼にとっても……春は僕には悪い季節なのだ、この眼がひどく神経質になるのが常だ。ここでは、アルプスが近いことによって空気に或る種のエネルギーがあるのではないかと期待している。今までのところでは僕の期待は外れていない。住民は感じがいい、僕は故郷を得た想いだ。僕はドイツノ官吏ト *come un ufficiale tedesco* 419
見られている、今の政治状況下では決して悪くない印象だ！――また僕はここで、ニース、ヴェネツィア、スイスよりも安く暮している。素晴らしいカルロ・アルベルト広場に面した一室が、サーヴィス付きで月二五フランなのだ。食事は非常に良いレストランでとって

いる。しかし僕は少ししか食べないから（いつもスープ一つと肉一片だけ）、この贅沢が続けられる（——内緒だが、僕は普通の飲食店 *trattorie* がいやで、殆ど病気になるのだ）。

また僕は再び仕事に没頭している、そして眼も頭も具合がいい。

——ニースではもう、こうは行かなかった。——

ケーゼリッツが彼の四重奏曲の完成を報せてきたのは非常に嬉しかった。ザイトリッツはエジプトから実にいい手紙をくれた（彼は「妻、母、犬、召使い」をそこへ同伴した）。デンマークから新聞の切抜きが届き、ブランドス博士がコペンハーゲン大学で公開講義「Philosof Friedrich Nietzsche」を行なうことをそれによって知った。

君の健康を心から願うと共に奥さんに呉々もよろしく、君の友

ニーチェ

① ジェーノヴァ付近の都市。正しくは、サン・ピエル・ダレーナ

三〇〇、ニーチェより

〔葉書、消印はトリノー、八八年四月一八日〕

親友よ、君に知って貰わねばならない或ることを書くのを、最近忘れた。つまり、あの我慢ならない「クンストワルト」誌をどうしてやろうかという問題だ。僕の頼みは、フェルディナント・アヴェエナリーウス氏（ドレーズデン、「クンストワルト」の編集者）に葉書で体裁よくこんな風を書いて欲しいのだ。ニーチェ教授はクンス

トワルト誌の今後の号をもう送って貰いたくない（同種の如何なるものをも）という希望をこれによって表明すると。そうしてくれると、僕は無礼な手紙を書かずに済むことになる（——このアヴェエナリーウスは僕を色々な甘言で悩ませてきた……）彼は、僕がこのインチキがらくた雑誌に感激していると思っっているのだ——ノ

君の N

三〇一、ニーチェより

〔葉書、消印はトリノー、八八年五月三日〕

親友よ、今ブランドス博士自身から報告があった。彼の講義は素晴らしい経過を辿っている。講堂は毎回「破裂せんばかりの」満員。三百以上の聴講者。凡ての大新聞が報道している。——彼は僕に「生への讃歌」を乞うている。結局彼がこれの最初の演奏を成就するのだ。——今日で僕はトリノーの最初の一ヶ月を終える、そしてさらに第二の一ヶ月を試みる。それからエンガディーンへ直行だ。大いに仕事だ、しかし上機嫌だ。

君の ニーチェ

三〇二、ニーチェより

トリノー、一八八八年五月二七日

親友よ、最近来たコペンハーゲンからの手紙を君にも読んで貰いたいと思う、ただしこれは何時か、ズィルス＝マリーアへでも、送

り返してくれ給え。

ところでズイルス^{II}マリーアは目前だ。僕は六月五日にここを出る積りだ、そして健康がいつもの悪戯をしなければ、六日に到着するだろう。旅に対して僕を若干元気づけてくれるのは、新しく出来た鉄道規定だ。トリノ^{II}キャヴェンナの通し切符を持てるのだ、

——これでもって、六回の手荷物書き換えという恐るべきつまらぬ難儀が終りになる。——

僕の健康は大体において持ちこたえた。トリノのこの二ヶ月間に病気になったのは四回だった。半分ノ回数 *mezzo termio* だと言える、これで満足しようと思う。

今朝フックス博士から、驚くべきエネルギーをまたしても証明する印刷全紙三枚分の長さの見事な手紙がきた。現在の音楽家中で最も才気に富むこの人物のペンに成る評論と音楽会報告との一大収集が添えられている。ゆっくりとこれ等を楽しもうと思う。

昨日はこの哲学者、パスカール・デルコーレ教授が僕を訪ねてきたが、非常に感じのいい訪問だった。彼はレッシャー書店で僕がここにいることを聞いたのだ。この人は今は哲学部長だ。——

フィレンツェの歴史文庫 *archivio storico* が最近の出版物(ドイツの歴史文献に関する総報告)で歴史に関する僕の全体的思想を賞揚している(第二反時代的考察)。この論文が結局こういうことになった。親友よ、僕が君にこのことを報せるのは他でもない、君が今までにある思想に関心を表明した唯一人の人物だからだ。——奥さ⁴²³んに心からよろしく

君のニーチェ

君が親切にも送ってくれたニュー・ヨークからの手紙は、アメリカ最大の評論誌の一つが僕の諸著についての英文の論説を載せる見込みだという内容を含んでいた。

三〇三、ニーチェより

ズイルス、エンガディーン、一八八八年七月四日

親友よ、今頃は君と、そして恐らくへとへとに疲れきった哀れな奥さんとが少しは落着きを得ているだろうと期待する。転居の問題における一番の難関は切り抜けられたものと思う。この際の僕の切なる願いは、君がこの前書いてよこしたあの悪い健康状態と一緒に引越してこなかったことだけだ。その様な客に対しては、君の新し^{II}い城は断固として門を閉ざして欲しい。とにかく僕は今回もまた君の性質の非常な強靱さに驚かざるを得ない。この点で君は僕を遙かに凌いでいる。——

この嘆きには原因がないわけではない。トリノを去って以来、僕は悲惨な状態にあるのだ。絶え間ない頭痛と絶え間ない嘔吐、僕の持病の再発だ。機械全体が全く役立たなくなる様なひどい神経消耗がひそかに生じている。憂鬱極まる考えに対して身を守る努力をしている。或いはむしろ、僕は自分の全体状態について非常に明晰な考え方をしている、しかし都合な考え方はしていない。健康が欠けているだけでなく、健康になるための前提条件も欠けているのだ。——生命力がもう無傷ではない。少なくとも十年間の損傷はも

う回復出来ない。その間僕はいつも「資本」を食って生きてきて、何も、全く何も儲けを入れなかった。これでは貧乏になる……生理学的なものを取戻しが利かない、まずく過ごしている一日一日が物を言うのだ。これを僕は英国人ゴルトンから学んだのだ。恵まれた環境のもとでなら、僕は極度の思慮分別によって、あぶなっかしいものではあっても或る均衡が得られる。その恵まれた環境が欠けていると、如何なる思慮も分別も役に立たない。前者の場合がトリノだった、後者の場合が、残念ながら今回のズィルスだ。僕は荒れてばかりいるいやな冬の天候の中へとび込んでしまったのだ、この天候はパーゼルの二月の様に僕を苦しめる。——氣象の印象にこんなにもひどく敏感なことは良い徴候ではない。これは、実のところ僕の本来的悩みである一種の全体的消耗の特徴なのだ。頭痛等の一切は結果症状であり、関連して現われるに過ぎない。——パーゼルの、そしてパーゼル以後の最悪の時期も全く同様だったのだ。ただ当時は僕が最高度に無知であり、医者たちが局部的疾患を探し求めるのを承認してしまつて、そのために禍が一つ増えたのだ。僕は断然、頭の病氣ではない、胃の病氣でもない。しかし或る神経消耗（これは一部は遺伝——やはり生命力の全体的欠乏の結果現象のために死んだ父からの——一部は後天性のものだ）の圧力下では必然的結果が色々な形で現われてくるのだ。当時行なわれるべきであつた唯一の養生法は、アメリカのウィア・ミッチェル式養生だったのではなからうか。つまり、価値の高い栄養物の極端な供給だ（土地、交際、関心事の絶対的変更と共に）。実際僕は無知だったために逆の

養生法を選んだのだ、そして僕は自分がジェーノヴァで全身衰弱のために死ななかつたことが今でも分らない。——

僕はこの題目について今ではどんな医者にも劣らぬ位に精通している。二〇年前にそうだったとしたら、こんな状態を避け得ただらうに……

親友よ、濟まないね、医学のことばかりのこんな手紙を書いたりしてノケーゼリッツ氏はミュンヒェンにいる。彼がくれた報せによれば、ワーグナーの「妖精」の初演は既に行なわれた。送金に對し心から感謝する。

君の友

ニーチェ

三〇四、ニーチェより

〔葉書、消印はズィルス、エンガディーン、八八年七月一二日〕
一八八八年七月一日、水曜

親友よ、良くなつたものは何もない、僕自身も天気も。今日は氷の様に冷たい空気が。厚く垂れこめている空。五週間に一日だけ晴天の、無論非常に冷たい日があつた（——残念ながらその日は僕はベットで過ごさねばならない次第だった）。それに反して昼も夜もどしどし降りる雨の日が二四日、そして雪の日が三日。気温は、まだ残つている多量の雪のおかげで、平均して低い。僕のこの高地滞在の初期は、寒暖計がエンガディーンでは例のない最高の目盛に達した蒸し暑いやな空気だった。二〇歩も歩けば汗が出た。それが急に雪

の天気変わったのだ。古老（八五歳）もこんな状態は全然覚えがな
い。

誠実をもって君の友

ローマから来た病気の紳士が出発する。ハンプルクの或る大家族
も。ホテルにとつては損害だ。

三〇五、ニーチェより

ズイルス、一八八八年七月二〇日

親友よ、何も良くならなかつた、天気も健康も、——どちらも依
然馬鹿げている。しかし今日は君に、もつと馬鹿げたことを話そう。
それはフックス博士だ。彼がその後呉れた手紙は一つの文献を成す
ほどだ（中には、目の細かい大型用紙十二枚の手紙もある）。僕は
読みながら次第に、はりねずみの様になった、そして昔の不信感が
完全に戻ってきた。彼のエゴイズムは実に狡く、他面臆病で奴隷的
であつて、そのため彼には一切が役立たない——彼の大きな才能も、
彼の本性の真に芸術的な多くの要素も。彼は、ダンツイヒの七年間
に世間全部を敵にできたことを嘆いている。そして彼が今もそこ
で信用を得ていないことが多くの点から分る。彼は去りたがつてい
る。ベルリン音楽学校との話が失敗した後、ドレーズデンと交渉し
ている。しかも彼は如何なる形式の運動をも追従をも欠かさなかつ
たのだ。最近の或る評論集がそれを示している。織細で優秀な点は
多いが、それは事柄を扱っている場合に限られる。人間を問題にし

N

ている場合には、「非常にちつぽけなもの」が支配している。彼は、
僕のために、欄外注を設けている。「これはひどい誇張です。しか
し私は彼にこれこれを負うています。或いは、「彼女は私をこの言葉
のために憎んでいます。私は馬鹿なことを言ったものです」。ベルリ
ンの大学の教授職が失敗に帰した後に、その三人の教授がダンツ
イヒへ来て音楽会を催した。フックスはその人たちを破廉恥極まる
ほどに賞め上げている。その弁解として彼は僕に、自分の不満を外
に現わしたくなかつたからだと言つてよこした。実のところは彼は
影響力絶大な三人に取り入ろうとしたのだ。——彼は僕に、僕の著
作についてエッセイを書く積りだと言つてきた、ところが彼は、無
神論者の僕の味方をすれば聖ペテロのオルガン奏者としての彼の地
位が傷つきはせぬかとの非常な不安を述べている。無論、偽名で書
くのだ。彼はもう僕の二人の出版者に、彼の偽名を秘密にしてくれ
と懇願している。その同じフックスは、僕との彼の関係がワグナ
ーのもとの彼の立場を悪くするかも知れないという非常な不安を
何年もの間抱いていたものだ。二、三年前、ワグナーの世界にお
ける僕の影響が疑いがないものとなつた時には、彼は熱心過ぎるほど
に僕の心を得ようと努めた。ワグナーが死ねば僕に手紙を書く勇
気が彼に戻ってくるだろうと僕は予言していたのだ。それは當つた、
滑稽なほどに。——彼はダンツイヒのユダヤ教会堂のオルガン奏者
もやつている。君には察しがつくと思うが彼は実にきたないやり方
でユダヤ人の礼拝をからかっているのだ（しかし彼は報酬を貰つて
いる！）

最後に、彼は自身の素姓について書いた手紙をくれたが、自身の父母についての吐き気のする様な無作法なおしゃべりが実に多いので、僕は我慢出来なくなつてその様な手紙を手荒くお断りした。手紙という突発事で僕の孤独を邪魔される気は全くない。——我々の関係はこんなままでなっている。残念ながら僕はこの種の人間を余りにも良く知っているので、我々の関係がこれで終つたとは期待出来ない。——

シュビッテラー氏が大いに感謝しながら手紙をよこした。彼が諦めていたことを僕がうまく成功させたのだ、つまり出版者を見付けることを。フランス戯曲の美学に関するものだ、そしてだね、ライプツィヒのクレードナー氏（ファイト商会、最高裁判所の出版物発行所）が僕に実に愛想よく承諾を約束してくれたのだ。

僕のこのちよつとした親切には一つのユーモアが隠されている、つまりそれは、この冬「ブント」に載つたシュビッテラーの、僕の全著作に関する極端に無作法でそして恥知らずな論文に対する僕流の復讐だったのだ。——僕は一回のがさつな行為によつて迷わされるにしては余りにもこのスイス人の才能を高く評価している（——僕は彼の性格を尊重している——残念ながらフックス博士に関してはそうは行かない）。シュビッテラーは僕の斡旋で「クンストワルト」の寄稿家にもなっており、僕の趣味から見れば、その唯一人の興味ある文士だ。ところで僕は同誌を断つた。この断りをひどく悲しんだアヴェナーリウス氏からの最近きた手紙に対して、僕は断固として真実を言つてやつた（——同誌はドイツ式の角笛を吹き、そし

て例えばふらち千万にもハインリヒ・ハイネを無視したのだ——アヴェナーリウス氏はユダヤ人なのに!!)。今これから僕のちよつとした音楽関係の小冊子（ワグナーの場合）が印刷される、非常に愉快なものだ（——トリノで書かれた）——奥さんにもお元氣祈る旨をよろしく

君のニーチェ

三〇六、ニーチェより

〔葉書、消印はズィルス、八八年七月二六日〕

親友よ、フックス博士のことでもう一言。彼はその後僕の手紙に返事をよこした、極上のだ——単に賢いだけのものではない。とにかく彼は、僕の手紙を当然のものと認め、それを予期していたときえ言っている。要するに、僕はまた元氣が出た、そして辛棒して行く。——同時にシュビッテラー氏（「パーゼル情報」の）から手紙がきた、彼はクレードナーについてひどく嘆いている。気の知れぬこの男は、万事約束済みなのに最後の瞬間になつて馬鹿げきつた口実のもとにシュビッテラーの原稿を送り返したのだ。美学的歴史的批評の傑作に八年間も出版者が見付からないとは、僕は助けるための新しい試みを行なつた。——ところで一人の老音楽家がドレーズデンから来てズィルスで演奏した。僕の様な、音楽の鱒というべき人間を見出して非常に喜んだ彼は、殆ど半世紀に亘る音楽の歴史を、珍奇極まる細目を混えながら僕に話した。一八四七年以来ドレーズデン宮廷劇場にいた楽長リッチウスだ。——天気は、まだ大いに文

句をつけられるけれど、晴れやかになってきた。僕もだ。この前の発作は確かに猛烈極まるものだった。僕は医者へ行った。ホテル・アルペンローゼは満員だ、その管轄下にある沢山の民宿さえも。

心から元気を祈る、君の

N

三〇七、オーヴェルベックより

バーゼル、八八年九月一二日

親友よ、昨日僕はカフタン教授を通じて君の挨拶を受けた。当然のことながらそれは僕には非難の様に感じられた、何しろ前回君に手紙を出して以来の期間は月を以て数え得るほどであり、一通のみでない君からの便りに僕はまだ返事をせずにいたのだからね。御存知の様に、僕は夏は具合が悪かった。学期が終った時には僕は本当の消耗状態だった。医者は転地を勧めていたのだが、その効用が僕には大して信じられなかった、しかし休みが始まってから直ぐに分ってきたのは、僕の全くの消化不良を癒すにはどっちみち仕事を殆ど全部停止して、その代り午前も午後も運動を大いにやらねばならないということだった。この時期に机のところへ行つたのは、或る幾つかの機械的な仕事のためだけだった、僕が長く捉えられていたひどい消沈状態の中では手紙ほどに気分に向かないものはなかった。附近への散歩以外にこの休みはまだバーゼルの離れたことがなかったが、やっと来週、今ここに来ていた僕の妹が去ったら直ぐ、フラウト二、三週間ミュンヘンへ旅行する積りだ。この休みにおける

その他のあらゆる時間的損失の代りに僕はもう既に少なくとも次の成果を挙げたことが僅かな慰めになっている、つまり、食欲が戻ってきた、ひどい衰えが止んだ、そして僕は良くなる見込さえ若干出てきた様に思う、そしてまた全体的健康状態も回復してきているので僕は元氣なく冬に向うわけではない。今年の気温状態は盛夏でさえこのバーゼルでは十分堪え得るものだったのだからという様なことを君が考えていそうな気がするが、とんでもないことだよ。さて昨日また君の消息を耳にしたことは、僕の心にちくりと刺さったことは別として、非常に嬉しく感じられた。何故なら僕は、この数年間の君の軍隊的に厳格な生活の分け方のおかげで君を視界から見失つてはおらず、君が君のおなじみの高地にいるものと考えていて差支えないのだと思っていたのだが、それでもこの夏の初めの報せとその後期の天候とは、不安な気持で君のことを考えさせるに十分であつたからだ。僕の義母が、無論八月の初めで特に悪天候だった時にだが、エンガディーンのツェレリーナを試してみたのだけれど、完全な失敗で三日後にはもう諦めてしまった。今日午前の気温は三度と五度の間を揺れた、そして昨日の夕刊はまたしても、この前の日曜に君たちのところが雨と雪だったというやり切れない報道を載せていた、その時は僕たちのところはどうかやら良くなつていたのだが。七月には僕たちも一日中八度しかなくてストーヴを燃そうと思ひ立ったことが何回かあつた。それで僕は、君がまたもや大いに苦しまねばならなかったのではないかと心配だ、そしてこの手紙がズィルス君の間に合えば幸いだと思つている。カフタンは君

が月半ばまでそこにいるだろうと言っていた。君自身の手紙で直ぐまた僕を安心させてくれ給えよ。とに角お願いせねばならないのは、送金をどの様にして貰いたいかを折返し報せてくれることだ。僕は今度は規定の受取り時期には不在だし、そして君がその後まで待つわけには行かないだろうと思う。国庫からの分を手に入れることは来週はまだ出来ないかも知れないが、ホイスラー資金の五〇〇フランはきつと引き出せるだろう、もしくは、君が近々必要としそうな額を前以て送っておいて、その後僕たちが帰ってから全部を片付けることにしてもいい。だからどうか君の望みを出来るだけ早く報せてくれ給え。僕が今まで返事を出さなかった君の何回ものお便りには心からお礼を言う。(フックス)に関するお報せが僕には特に驚きであった、つまり、それ等の報せがまさに「びたりだった」から驚いたのだ。君の様に彼によって接近される者は誰でも、彼の非常な精神的軽快さやその他の融通性に接して、どんな危ない場合にも必ずちゃんと足で立つ猫を繰返し経験することだろう。——シュピッターのことで君の善意がそんな風に失敗したことは全く悲しい、しかし僕は必ずしも驚かない、僕は既にクレードナーについては何回も香ばしくない話を耳にしているからね。特に同僚のK——ここの解剖学教授——も、商人としての彼については大いに文句の種があると言っていた。その作家『カルル・シュピッターは八〇年代にはバーゼルで編集者としてジャーナリストティックな活動をしていた』のものに僕は最近しばしばお目にかかったのだと思う、何故なら、僕が耳にしたところによるとこの夏休みにはポルンに代つ

て彼がバーゼル情報の社説を書いているとのことだったから。それ等を読んでいた時も僕は、非常に尊敬すべき、この箇所には——社説一般のことであって特にポルンのものを指しているのではない——現今稀な、そして実に嘆かわしいことだが殆ど効果の現われない考え方をいつも嬉しく思った。——報せてくれた愉快な音楽的小冊子が大いに楽しみだ。——君はアウグスト・ミュラーの「東洋と西洋とにおけるイスラム教」を知っているかね、今僕はそれを今度の冬の教会史講義のために極くゆくりと読んでいる。君にこの書を、情報獲得のために大いに勧めることが出来る、しかし言葉の調子とテーマの扱い方は我慢ならぬ代物であり、歴史的「偉大」に捧げようと彼が断然決心した忠誠の誓と、対象に対して彼が満足気に常時使用し時折は無作法極まる滅茶苦茶な言い回しで述べられるイロニ——との間をふらついている。この調子は、北ドイツの学者間で好まれていて明らかに彼等の品位を保つためのもののだが、読者の心に残す感じとときは、自分の問題を知ってはいてもそれをどう言ったらよいか碌に分らない教師を相手にしているかの如き不快な感じだ。判断は気取っていて不確実だ。——今度の冬に対する君の計画の報せをも緊張して待っている。もし分っていたらケーゼリッツのミュンヒェンの住所も報せてくれないか。もう長いこと彼にも失敬している。フラウが心からよろしくと言っている。

君の誠実な

F・オーヴェルベック

三〇八、ニーチェより

〔ズィルス、八八年九月〕

親友よ、手紙を貰って本当に心が軽くなった。何しろ君のこの前の便りから推測したところではどう見ても君の状態が上乘ではなかったからね。良い方へ、少なくとも比較的良い方へちょっと向ったことは確からしいね。結局僕が思うには、非常に思わしくない気象状態がどんな種類の消耗をも今年に危険なものにしているのだ、——僕は経験から言っているのだ。僕たちは自然の生の全体から決して隔離されていないのであり、太陽の欠乏のために葡萄がうまく実らなければ、僕たちも酸っぱくなる……奇妙なことだが、この高地の僕たちには一番物凄く忍耐試験が一番最後まで保留されていたのだ。まさに恐るべき状態が先週ずっと続いた、——僕はまたもや何日も失神した様になって横たわっていた。雨量は四日間に降った分だけでも二二〇ミリだ、丸一ヶ月の標準量がズィルスでは八〇ミリなのに。それでもズィルスは、この惨事（——エンガディーンの歴史に未聞のノ）を損害なしに免れたエンガディーン唯一の場所だった。——僕がいつも出入りし、しかし食事は独りで食べることにしている僕のホテル、アルペンローゼはこの夏、ライブツィヒのペーデカー夫妻を二、三ヶ月お客にするという栄を得た。大した点数稼いだ、ズィルスにとってもノ——非常に気持がよくて機知に富み洗練されていてその上に輝かしい立場にいる一音楽家がここでの僕の交際の一つだった。ハンブルクの音楽学校のフォン・ホルテ氏だ。彼は僕のためにちょっとした私的演奏会をやってくれて、ケーゼリ

ツツのものばかり（彼は僕のために覚え込んだのだ）を楽譜なしで弾いた、——「繊細で好ましい音楽に」夢中になりながら。——ハルナックの任命^①を知った時には僕は大いに君のことを考えた、今度の若い皇帝は思っていたより具合がいいことが段々分ってくる、——彼の最近の行動は強烈に反^②反ユダヤ主義的であり、厄介なシュテッカー一味から彼を丁度良い時に手際よく抜け出させた二人（ベニヒセンとフォン・ドウグラス男爵）に対して今や公然と大感謝を

表明している。——彼の母^②に対する彼の態度は、ドイツと英国とにおける党派根性が希望するであろうよりも百倍も思慮深いものであると僕自身は聞いている。——僕のことを話そうか？ 大体において僕は今までより以上に、僕の軌道にのっており或る大目標に近づいているのだという大きな落着きと確信を感じている。僕は自分自身驚いているのだが、もう僕のあらゆる価値の転換の第一書を決定的形式で半分書き上げた。この書は、如何なる哲学者によっても獲得されたことのない様なエネルギーと透明さを持っている。僕は突如として書くことを覚えたかの如くだ。問題の内容、情熱の点では、この作は数世紀の間を切つて抜けるほどのものだ——第一書は、内緒で言うが、「アンティクリスト」という名前であつて、今までクリスト教の批判のために考えられ言われてきたこと一切がこれに比すれば全く児童に類すると僕は断言したい。——この様な企ては、深い中休みと気散じを衛生的に必要とする。その種のものが十日位たったら君のところに参上するだろう。「ワグナーの場合。音楽家の一問題」というのだ。これは容赦ない宣戦布告だ——僕の出版

者の報せでは、もう数週間前から（書籍新聞での最初の広告に応じ
て）実に多くの注文が入ってきているから一〇〇部の版は売切れ
と見なし得るとのことだ。「欄外に。要求部数が後になって横這い
にならないことを前提として。つまり、ひとえに状況の如何による。」

別の原稿も完全に印刷可能になって、もうC・G・ナウマン氏
の手に渡っている。しかしこれは暫くまだ寝せておきたい。「一心
理学者の消閑」というのであって、これは僕の決定的な哲学的異端
説を実に簡潔な（機知縦横でもあるかも知れない）形式で表現して
いるから僕にとっては非常に大事なものだ。ところで同書は甚だ「
時代的」だ、つまり僕は、今日のヨーロッパのありとあらゆる思想
家や芸術家について色々僕は、「お世辞」を述べているのだ——そ
の中でドイツ人に対して精神、趣味、そして深さの点で仮借のない
真実が面と向って言われていることは別として。——

数日後にトリノへ発つ積りだ。春が実に例外的に良かったので
その秋を知る試みをせぬわけには行かない。大いに勤勉な、もし
て内面的に決定的な何年かの間、僕の生活にズイルス、トリノ、
ニース、トリノ、ズイルスという風な規則的秩序を与え得たとす
れば、何と有難いことだろう。ニースは何処か新しい場所と代える
必要がある。食事と交際の点で、ズイルスにおけると同様の完全な
独立を得るためだ。僕のニースの冬の殆ど凡てが不必要に暗かった
こと、一種の失敗とさえ言えることの原因は、これ等の二点におい
て僕が行なった譲歩にある、ということを僕は発見したのだ。ズイ
ルスだって全く同じだったのだが、去年の夏以来やっとな僕は自分の

435

足で立っている——そしてこのズイルスがまさに僕にとって何と貴
重なものであるかを知ったのはそれ以来のことなのだ。——僕自身
の生き方に対する判断基準として僕は、自分の仕事能力の大きさ以
外のものを持っていない。去年の夏に僕は「系譜」の三論文を一ヶ
月足らずで印刷可能なまでに書き上げた。今年の夏はあの「心理学
的消閑」を二〇日で片付けた。——この能力は特に視力にも現われ
る、他方、食事の失敗や悪天候は必ず直ぐに僕の視力を弱める。——
——まだ話すことがある、しかし、古い友よ、僕たちだけの秘密だよ。
ベルリンから、「匿名を欲する」友人や崇拜者たち（しかしその中
のドイセン教授は仲介者として自分の名を明かしている、多分、主
要加入者でもあるだろう）が二〇〇マルクの「表彰金」を僕に送
ってくれた。僕は、僕が困窮状態にあるかの如き考えをはっきりと
拒絶すると共にパーゼルの寛仁に感謝している旨を述べ、自著を自
分で出版せねばならない必要の点でのみそれを受け入れた。事実そ
の金は実にいい時に来た、——僕はこの馬鹿らしいほどの出版困難
の中で息を吹き返している。——だからこの面では僕はパーゼルの
貯金を要求せずに済むだろう。——この次に支払われる一〇〇〇フ
ランはニース滞在の時になってから頼むよ、つまり十一月一日頃
だ（は——何たる日だ！）。僕がちょっとばかり節約したことが分る
だろう、トリノでもここでもだ、それで二、三ヶ月はまだやって
行けるのさ。——

御免よ、親友よ！手紙が君の健康には少々長くなり過ぎたらしい
と気が付いたよ。奥さんに呉々もよろしく、

436

変らぬ愛着をもって

君のニーチェ

宛先、大体のところ九月一八日から十一月一四日まで、トリリーノ（イタリア）局留。

そこでの、サヴォイエン公家とポナバルト家の大婚礼が済んでからでなければ駄目なのだ。今はそのホテルは満員だ。

① ベルリン大学教授として。

② ウィルヘルム二世の母は英国人であった。

③ 注の必要は無いと思うが、オーヴェルベックの誕生日である。

三〇九、ニーチェより

〔葉書、消印はトリリーノ、八八年一〇月八日〕

トリリーノ（イタリア）局留、一八八八年一〇月九日

親友よ、今回は一つのお願ひだけであつて、僕が例によつて手許に持っていない僕自身の著書の或る箇所を教えて欲しいのだ。「人間」的、余りに人間的なもの」第一巻の中の「国家を論じた節で僕は民主政体を国家の衰頹の形式と名付けた。その箇所の頁数を知りたいと思う。——恐ろしい水害のその後の経過が僕のズィルス出発を可能にしてくれる様になつた時に直ぐ出発して、九月二二日以来ここにいる。調子は、ぞつとする思い出として残っているこの夏に比してぐんと良くなった。君からも同様の報せがくれればいいが。

心から誠実な

君のニーチェ

三一〇、オーヴェルベックより

バーゼル、八八年一〇月一四日

親友よ、君が言つてよこした箇所は人間的 I の三一八頁だ。これを今日まで待たせて済まなかつた。僕は、君の葉書が着いた当日にやつと帰つてきたのだ。その後あれこれが襲つてきて僕は、君の前の手紙と、そしてその後、しかも僕の出発の数時間前に到着した音楽関係の楽しみとに対する心からの感謝をも述べねばならないこの返事を書くことを考えるわけに行かなかつた。同書を読みながら僕は、飛び切り「愉快な」ものだと前以て報されていたものだから、勿論少々混乱を感じた。何故なら、愉快なもの、非常に愉快なものがその中に見出されたもの、しかし全体からは全く愉快でない印象を受けたからだ。しかも、僕自身の評価において特にショックを受けたためではないのだ。全く逆なのだ。僕は数日前にまたドン・ファン^①をミンヒエンで聴き——よそで聴いたものに比べ^②て驚くほど良い演奏だつた——その後僕に、これが音楽だとするとワグナーを音楽家として真面目に考えるわけには行くまいという疑念に完全に捉えられたのだつた、そして、何れにしても彼は全く「俳優」としてしか問題にならないのだ——結局僕は、問題全体の性質上、君から愉快なものなんか出てくる筈がないと考えたのであり、君も、三九頁によれば、愉快さを狙つたわけではないのだ。君がこの書で成功を得るかどうかは僕には全く見当が付かない。成功のためには四八頁^③が残念に思われる、だつて君は、君に敵対的な世の判断に対する君の評価を全く曖昧でなく理解させる手段が他に

ないわけではないのだもの。ところで君が数年間に経験した一切のことを考えれば、ベルリンの信奉者たちについての君の報せが僕を非常に喜ばせたことは分るだろう。今君は一一〇〇フラン余りをこの職工銀行に預金してあり、一〇月一日に国庫の支払期限がきている五〇〇フランは僕が数日中に引き出して君から指示があるまで保管しておこう。——ミュンヒェンで僕はその他にも観劇を行ない幾つかの著しい印象を受けた。それまで全然知らなかったイプセンの「社会の柱」はこれほど巧みなドイツ戯曲を観た試がないと言つてよいほどのものだった、しかしミュンヒェン上演に好んで用いられる調整を施したシェイクスピアのペリクレス『上演されることの珍しいこの作品はC・フォン・ペルファルの音楽付きで一八八八年九月二七日にミュンヒェン宮廷劇場において演ぜられた。その晩のオーケストラ指揮者はリヒャルト・シュトラウスであった(王立バイエルン宮廷劇場総管理部よりの好意的情報)』を観た時にはまたしても、全体的にわれわれのところの劇場が実際に大きな子供たちのための施設になってしまつていて、実験によつて暮しつつ子供っぽさをも恥ずかしかる必要がなくなつていふのだという確信を抱いた。ケーゼリッツがまだミュンヒェンにいるのかそして見るとすれば何処にかという問いに対する答が君の前回の手紙に見当らなかつたのは実に淋しかった。今や僕としては、連絡を回復するためにサン・カンチアーノへ手紙を出す以外に手が無い、この範圍からは彼が失せることはあるまいと考へて。ミュンヒェンでは僕たちはひどく凍えた、そしてここももう悲しいほど秋めいている。しかしミ

ュンヒェンの空気は僕に何時も良い作用を及ぼす、ただし今得られている健康状態は長持ちしないのではなからうかと心配だ。少なくとも冬の終り頃は、この前があんな風だったから、懸念される。——フラウはミュンヒェンから持ち帰ったひどいカタルがやつと良くなったところだ、それ以外は彼女は好調でこの小さな持ち家に大いに満足している。君に呉々もよろしくとのことだ。
常に誠実な

① モーツァルトのオペラ。

② 第二節。

③ 「第二の後書」の冒頭部。

三一、ニーチェより

トリノ、一八八八年一〇月一日

親友よ、僕は昨日君の手紙を手を持ってトリノ郊外のいつもの午後の散歩をした。何処も澄み切つた一〇月の光に溢れていた。一時間ばかりポー河にびたりと沿つて僕を導いた素晴らしい林間道路は、まだ殆ど秋の感じがなかった。今の僕は世界で最も感謝している人間だ——言葉のあらゆる良い意味において秋らしい気分である、つまり今や僕の大きいなる収穫期なのだ。こんなに大きな事柄にたずさわつた者は無かつたと思われるほどであるのに、何もかもが僕には容易になり、何もかもがうまく行く。あらゆる価値の転換の第一書が出来上つて印刷に付するばかりであることを君に伝えるこの気持

は何とも言い様がない。四つの書になる筈で、一つずつ出版される。今度は僕は、老砲兵として、僕の巨砲を引っ張り出す。僕は、人類の歴史を真つ二つに撃ち裂きはせぬかと心配だ。——この前の手紙で暗示したあの著作は間もなく仕上がる。目下全く大事な僕の時間を出来るだけ奪わないようにと、それは素晴らしい正確さで印刷されてきたのだ。「人間的、余りに人間的なもの」から君が抜いてくれた箇所はちゃんと間に合つて到着し、そして記入された。——この著は百倍の宣戦布告と言ふべきものであり、山中に遠雷を伴っている。前景には多くの「愉快なもの」がある、僕の条件付き愉快さを帯びたものが。「欄外に。この時期の非常な緊張の中にあつて、ワグナーとの決闘は僕にとって完全な気晴しだった。また、僕が公然たる戦いに立ち上がる現在、僕の「手首は自由なのだ」ということを何時かは公に示しておくことが矢張り必要だったのだ……」……この著を読めば、実際何もかもを破壊してしまう僕の異端説の程度を驚くほど容易に知ることが出来る。同著で僕はドイツ人たちに全面攻撃を行なっている。君が「曖昧性」を嘆くことにはならないだろう。文化の大きな不幸の一切に対して責任があり、歴史のあらゆる決定的瞬間に何か「別のこと」を考えていた（——ルネッサンスの時代には宗教改革を。科学的な思考法が英国とフランスで骨折つて獲得された時に当つてはカントの哲学を。ヨーロッパを一つの政治的経済的統一体とするだけの強さを今までに持っていた唯一の人物ナポレオンの出現に際しては「独立戦争」を——）この無責任な種族は、今日、大きな価値問題が初めて提出される瞬間に、「帝

国」を、小国分立主義と文化——原子論とのこの再発を念頭に置いてゐるのだ。歴史上これほど重要な瞬間は決してなかった。しかしこのことを若干でも知っている者があろうか？ここに於いて歴然としてくる不釣合は全く必然的なものだ。いまだかつて予感されたことさえない高さとも自由さとも精神的情熱が人類の最高の諸問題を占取して人類の運命の決定を生ぜしめる瞬間には、一般的な矮小さと愚鈍さとはそれだけ益々際立たざるを得ないのだ。僕に対しては全然まだ何らの「敵対」もない。つまり僕の事柄に対しては聴く耳が全くないのだ、従つて、賛成も反対もない……

親友よ、お願いして良ければ、君が報せてくれた五〇〇フランも職工銀行に預けてくれ給え。僕は今は全力をあげて儉約をせねばならない、今後三年間の非常な印刷費に堪えるために。（だから僕は、一〇月一日に支払期限がきた一〇〇〇フランが今はそっくりそこに預金されているものと考える。）一二月末には勿論五〇〇フランが是非とも必要となる。僕の計画では一月二〇日までここで我慢することになつてゐる（——少々寒々する計画だ、冬の来るのが早いから）。それからニスへ行つて、そこで従来慣例を完全に廃棄して、僕が今必要としている生活を打ち建て積りだ。時にはコルシカのバステリアをも考えた。しかし、僕に必要な深い自己省察の真只中にある僕は、実験とその危険とを恐れる。

ケーゼリッツ氏はベルリンに移つた。彼の手紙は地上で望み得る最良の精神状態を表わしている。また、彼にはちよつとしたことが生じてゐる。これについてはまた何れ。住所は、ベルリン南西区、

リンデン街一六番五階左側。

感謝しつつ君と奥さんのお元気を祈る

君のニーチェ

① ニーチェは、ガストがベルリンに結婚する筈の恋人を持っているものと考えていたのである。一月半ばになってからその誤りを納得したこと(ガスト宛書簡集二六六番の注を参照)。

三二二、ニーチェより

トリート、カルロ・アルベルト街六番III

一八八八年十一月二三日

親友よ、一月一六日という特別の場合なのだから、手紙を書いたばかりなのに今日また手紙を出すのを許して貰えると思う。君たちのところはもう冬かも知れないね、こちらでも直ぐだ、——近くの山々がもう薄化粧をしている。冬がこの秋と同様であってくれればいいと思う。少なくともここでは、秋は本当に驚くほど美しく、そして光に溢れていたのだ、——ずっとクロード・ロレンの絵の様だった。僕は「好天気」という概念の全体を学び直した、そして僕の馬鹿げていたニス執着を思い出すと哀れを覚える。——あそこに置いてきた僕の書籍は既にトリートへの途上にある、この機会に僕は、ジュネーヴ館に昔の僕の愉快な食卓仲間フォン・ブランダイス夫人が到着したことを知った。——カルボン・ナトロン・ストーヴも途上にある。非常に適正な価格であることをドレーズデンのニー⁴³スケの名誉のために言わねばならない。素晴らしい英国製の冬手袋を

① 一組今日買った。——古い友オーヴェルベックよ、僕について何かまずいことを話そうとしても、どうしてもうまく行かない。仕事と上機嫌が最大速度 *tempo fortissimo* で進行中だ。また僕はここでは何か非常に特別なものとして申分ナク *comme il faut* 扱われている、僕にドアをあけてくれる或る作法が存在するのであってこんな作法はまだ何処でも体験したことがない。僕が非常に良い場所のみを訪れ、また、第一級の仕立屋を楽しんでいることを認めるとしてもだ。——先ごろ、全イタリヤから参列者が集まった一大葬儀の悲しい壮観があった。ピエモンテの貴族の最も高貴な典型であるロビラント伯爵だ、序でながらカルロ・アルベルト王の本当の息子であることはここでは周知のことだ。彼を失うことによつてイタリヤは、かけ替えない一人の宰相を失ったのだ。——直ぐ続けてだが、朗らかな話をする。トリート貴族階級の美人たちは、スパー^③で栄冠を得た美人たちの写真がここに到着した時、元氣一杯になつてしまつた。彼女たちも直ぐ一月にある美人コンクール *concorso di bellezza* に注目した——僕が思うに、彼女たちは皆その資格がある、僕は春季博覧会の時に既に、肖像でのその様なコンクール *concorso* をこの眼で見たのだ。アオスタ公と最近結婚して新しくトリート人になられたラエティティア・ボナパルテ妃も喜んで参加されるだろう。——その後僕は、僕の「ワグナーの場合」に対する真の忠誠の手紙を幾つか受け取った。この書を、今まで誰一人として眼識を持たなかった一分野——音楽家の心理における第一級の心理学的傑作だと述べているばかりではない。現代の音楽全般のデカダン

斯的性格に関する説明を、文化史的事件であり僕以外の者には出来なかつたことだと述べている。ブラームスに関する言葉は心理学的明敏さの最たるものであるとのことだ。——シュピッター氏は「ブント」の木曜日の号で彼の感激を述べた、ケーゼリッツ氏は「グントワルト」で。パリからは一論文が近く新評論 *Novelle Revue* に載るといふ報せがきている。——他にも良い報せが幾つもある。ブランドス博士の言によれば「真の天才」であるスウェーデン最大の作家アウグスト・ストリンドベリが最近、全く僕に賛成であることを表明した。ペテルスブルクの上流社会も、僕の著作に対する禁圧に大いに悩みながら僕と関係を結ぼうと努めている（ウルソフ侯爵、アンナ・ディミトリエヴナ・ティニシェフ侯爵夫人）。最後に、魅惑的なビゼー未亡人！……

「偶像の黄昏。あるいは、人は如何に鉄槌を以て哲学するか」の印刷は終った。「コノ人ヲ見ヨ。人は如何にしてその在るところのものとなるか」の原稿は既に印刷所にある。——絶対的重要性を持つ後者は、僕と僕の著作とについての若干の心理学的な事柄を、さらに自伝的な事柄さえも述べている。僕自身が突如として姿を現わすのだ。この書の調子は、僕が書く凡てのものと同様に朗らかで宿命的だ。——それから来年の末に価値転換の第一の書が出される。これはもう出来上っている。——

君の心身の好調を心から願いつつ、

君のニーチェ

① 原書では「若干 *en paar*」であるが、「一組 *ein Paar*」の誤りと考えて

訂正した。

② 北部イタリアの地方名。

③ ベルギーの都市。

三三三、ニーチェより

〔葉書、消印はトリノ、八八年一月二十九日〕

八八年一月二十九日

親友よ、ベルリンからの非常に良い報せ。「プロヴァンス風の四重奏曲」（僕に捧げられた）のヨアヒム自身による演奏が公算大になつてきた。ヨアヒムの四重奏団が古典音楽しか演奏しないことを考えれば、第一級の荣誉だ。ド・アーナも魅せられている。——最重要な点ニオケル *in puncto puncti* ケーゼリッツの競争相手はシユリーベン伯爵という若い人物だ——お気の毒だが全然望みのない競争者だ……

もう一つのニュース。スウェーデンの天才ストリンドベリは僕を——永遠に女性的なるものについての最大の心理学者と考えている。彼は彼の悲劇「父 *Père*」（ゾラの熱狂的序文付き）を送ってくれたのだが、これは実際、僕の愛の定義（——例えばワーグナーの場合に載っている）を壮大なやり方で表わしている。僕は今、この作をパリの自由劇場 *theatre libre* で上演させようと骨折っている。

N

三一四、ニーチェより

トリノ、カルロ・アルベルト街六番Ⅲ

〔八八年二月〕^①

親友よ、僕は今僕の金を計算している、——どうやらまだ一〇〇フラン持っているから、困りもせずに月末頃の君の送金を待つ。誤算しなかったのを得意に思っている。何故なら……

秋とそして冬の初めとは引続き僕に非常に好意的だった。それで僕の仕事と非常な元気とは一瞬も衰えなかった。僕の今の気晴しは、マドリッドから来たスペインのオペレッタだ。類のない代物で、もったいぶった賤民 *canailles* ばかり、無頼漢ばかりだが、素晴らしき *grandezza* を持っている。——

到る処から良い報せ。パリからのちよつとした手紙を同封する、テーヌ氏からのものだ。折返し返送をお願いする。ジュルナル・デ・デバ *Journal des Debats* の編集長と関係をつけることを彼は僕に提案しているが、それが出来れば非常に嬉しい。僕は数年来、他の新聞は読まぬ様になっているのだ。——パリでは僕の「ワーグナーの場合 *Fall Wagner*」がセンセーションを起こした。僕が生粋のパリ人であるに違いないとか、「場合」における僕の様にフランス的に考えた外国人は前代未聞だとか、僕は言われている。——ペテルスブルクから僕は真の忠誠の手紙を幾つも受けた、愛の告白も含まれている。ゲーオルグ・ブランデスはこの冬またそこで講演をする。僕は今や讀者を——そして幸いにも、僕の名誉となる選り抜きのインテリゲンチヤばかりだ——到る処に持っている、なかなんず

446

健康はどうかね？

君の古い友人

① ニーチェは一六日ガスト宛の手紙の末尾に、「たった今、テーヌの素晴らしい手紙が到着！」と書いているから、三一四番はそれ以後のものである。三一五番の追伸でオーヴェルベックが述べている二〇日のニーチェ宛の手紙はこの手紙に対する返事であつたらう。

② ニーチェが二月六日から七日に受けたストリンドベリからの手紙にはこう書かれていた、「私は友人宛の凡ての手紙をこう結んでいます。ニーチェを読み給え！これはわが *Carthago est delenda* だ！」。 *Carthago est delenda* は、「カルタゴは滅するべきものなり」「両雄並び立たず」であるが、この場合は名詞として扱われているから「不倶戴天の敵」と訳しておく。

三一五、オーヴェルベックより

バーゼル、八八年二月二日

親友よ、今日もう金を受け取った。同封のものは、この金では四九七、五フランの価値しかない。ところでさらにちよつと付け加えることがある、これは何ヶ月も前から君に報せようと思つていたことなのだが、今日の機会にまた思い出したのだ。この教会及び学校関係財産の会計係が既に一〇月に、ここの君の年金の受取り役

447

を僕に委任する旨のドイツ領事承認済みの正式委任状を君から貰って提出してくれと言ってきたのだ、僕たちの様な場合には常に彼のところに委任状が提出されているのだそうだ。古ぼけた頭の杓子定木なやり方に過ぎないことは分っている、何しろそんな仰々しいこととはこんなにも長い間行なわれてこなかったのだし、要求の持ち出し方も大いに弁解しながらであり自分は不必要と思うのだがと断言していた位だからね。何れにしても一旦持ち出された以上、拒絶は不可能だった、そして今日は、途中でやっとそれを忘れていたことを思い出したので、まだ従前通りのやり方が通用するかどうかを試してみる他なかった。無論それでよいことにはなったのだが、僕は今度は君にこのことを報せると約束してきた。それがまだ君に可能かどうか、またどれだけの手続きを取れば君がドイツ領事から証明して貰えるのかは、勿論僕には分らない。少なくとも君の今の滞在地で便宜が得られるだろう、だから、若しうまく行ったら、要求された書類を次の時のために僕に送ってくれる様お願いする。

今年も君が無事に終えて元気に新年を迎えることを心から願っている。

いつも君のものなる

F・オーヴェルベック

君に昨日手紙を書いた、そしてそのちょっと前に僕は、ここへ宛てられてきたベルリンからの手紙——差出人はレーオ・ベルク——を君に転送したのだった。何れもが君の手に渡っていれば幸いだ。

三一六、ニーチェより

トリノ、一八八八年一月二二日

親友よ、お互い同志の深い信頼があるのだから君は何年だって沈黙している権利を完全に持っているにも拘らず、色々と書いてくれて本当に有難う。僕は今アンドレアス・ホイスラーへ挨拶を送ったところだ。或る非常に快適な偶然のおかげで、昨夜彼が僕の心に浮んだのだ、しかも特に良い感じで。失敬ノしかし僕が今書く手紙の殆どが、僕の生にはもや偶然は存在しない、という文句で始まるのだ。——C・G・ナウマンは、偶像の黄昏の發送が一体始まるのかどうか、始まるとすれば何時なのかをまだ報せてよこさない。

思うに彼は目下僕のことと非常に多忙だ、コノ人ヲ見ヨは印刷全紙二枚が到着した。——今回はパーゼルを大いに考慮に入れたから、僕を知ろうとする試みがなされることは間違いない。少なくとも、僕が馬鹿ではないということにはなるだろう。君へのものは別として、図書館、読書クラブ、パーゼル情報、シュピッター氏への献本が決定されている。並ならぬ榮譽を帯びて二回登場するヤーコブ・ブルクハルトには、ナウマンが僕のために送ってよこした最初の献本を贈呈した。——僕が望んでいるのは、ケーゼリッツの僕に関する大論文、簡明深遠な一傑作——クンストワルト所載、同誌の編集長も僕に話しかけてきているが、極めて尊敬すべき人物だ——がパーゼル情報か何かに転載されることだ。この論文には挑戦的な点は全くない。「ニーチェに対するドイツ人たちの振舞は彼等の増大する精神的劣等性の歴史に新たな一頁を加えるものである」という

文句はパーゼルの人た^ちを傷つけはし^{ない}と思^う。——

次に「フリッチの場合」——このことがあるから君に手紙を書かねばならないのだ。僕の出版者なのに、ツァラトウストラの出版者なのに①——即座に僕は彼宛にこう書いた、「私の全著作に対して如何ほど要求されるか？心から軽蔑しつつ、ニーチェ」。返事は、約一〇〇〇マルク。——

これは僕にとって作法の問題なのだ、こんな「——」に対して「名誉」という言葉を誤用しない様に用心したい。——このことで僕の相談に乗ってくれているC・G・ナウマンは、慌てないで値段の引き下げを目指すことを勧告してきている。勿論、現在僕がやっている物の言い方は彼を仰天させるかも知れない、だから僕は値段引き下げなんか当てにしている。根本においてこのことは第一級の幸運事なのだ。それが売られることになった瞬間に僕は僕の著作を一人占めに出来るのだ。何故ならC・G・ナウマンのところの著作も僕の占有物のだから。

問題、今や如何にして一〇〇〇マルクを作るか？僕のパーゼルの貯金は全部でどれだけだろうか？——貯金はこのためではなく、今後数年の巨額な出版費のためのものであったことを僕は認めるけれど。結局は僕は生まれて初めてそのために借金をするかも知れない、僕の「支払い能力」は今後数年間に決して貧弱にはならないだろうからね。パリの優秀な出版者、例えばルメールと、僕はコノ人ヲ見ヨに関して、パリの一流の小説家たちが結んでいる様な契約を結ぼうと思^う、フランスの支配的な二雑誌の断然勢力あるこの編集長の

仲介でだ——そうすれば僕は版を重ねることツラのナナをささやくだろう……君の意見はどうかね？——君と奥さんに悦ばしいクリスマスをお願いつつ、

君の友ニーチェ

「欄外に」注意しておくが、僕はテームに全く直接に、フランス語で読まれる手段、翻訳される手段を教えてくれる様に頼んだのだ。この目的のために彼は僕にB氏を拳げてきたのだが、そうは感じられないほどデリケートにだ。

① フリッチの「音楽週報」一〇月二五日の号にリヒャルト・ポールのニーチェ講義論文「ニーチェの場合」が載っていることをニーチェはガストから一月中旬に報された。

② テームが宛先を教えてくれたジャン・ブルドーを指している。「欄外」及び三三四番の手紙を参照のこと。

三一七、ニーチェより

〔トリートノ〕クリスマス（一八八八年）

親友よ、フリッチのことを早くしなければならぬ、何故なら二ヶ月経てば僕は地上第一番の名前になっているからだ。——

さらに敢て述べるならば、パラグアイの状態はこれ以上ないほど悪い。誘惑されて出掛けたドイツ人たちは激昂しており、彼等の金を返せと要求している——金なんか全然ない。既にひどい騒ぎが起こっている。極端なことになるかも知れない。——それに妨げられもせずに僕の妹は、一〇月一五日に当って非常な嘲りの調子でこんなことを書いてよこした。あなたも「有名」になり始めているらしい

わね。勿論結構なことですわ／それにしても何という賤民を探し出したのでしょ。ゲーオルグ・ブランドスの様な、何にでも首を突っ込んでなめ回してきたユダヤ人たちとは……こんなことを書きながら彼女は僕を「心のフリッツ／」なんて呼んでいる……こんなことがもう七年も続いているのだ／——

母は今までそのことに全く気付いていない、これは僕の傑作だ。母はクリスマスに一つの戯曲を送ってよこした。フリッツとリースヒエンというのだ……

このトリノで不思議なのは、僕が及ぼしている全くの眩惑作用だ、僕はこの上なく無欲な人間であり何にも求めないのだ。何しろ僕が大きな商店に入って行くと、どの顔も変化するのだ。路上の婦人たちは僕を注視する、——行きつけの露店の老婆は僕のために一番甘い葡萄を取っておいてくれ、そして値を引いてくれた／……その値はもともと微笑ましいものなのだ……僕が食事をするのは一流料理店の一つで、ホールや部屋の沢山ある巨大な階を二つも占めている。僕は食事ごとにチップを含めて一フラン二五サンチーム支払う——そして僕が貰うのは選り抜きの調理をされた選り抜きのものだ〔欄外に。教訓。事実僕はまだ全然胃をこわさずにいる……〕——、僕は肉が、野菜が、これ等の本来的イタリア料理の一切が如何なるものであり得るのかを全然知らなかったのだ……今日は例えば、実に素晴らしいオソブキだった、ドイツ語でどういうのか分らないが、多くの骨に接している部分の肉であって、そこには絶妙な髄がある。それに添えられているのは、信じられないやり方で調理さ

れたプロコリだ、何よりも先ず実に柔かいマカロニだ。——僕のボイたちは上品さと好意とで輝いている。要するに僕が誰をも差別したりしないからだ……

僕の生涯には今後色々なことが生ずるだろうから、まだ見出されていないこの時代にあつて僕を見出したこれ等の人たちを全部僕は記しておくのだ。僕の未来の料理人が既に僕に仕えているのだということを僕は否認する気はない。——

まだ誰一人として僕をドイツ人とは考えなかった……僕はジュルナル・デ・デバを読むのであつて、一流のカフェに初めて入った時も直覚的にそれを持つてきてくれた。——

実際もう如何なる偶然も存在しないのだ。誰かのことを考えると、その人の手紙が戸口から愛想よく入ってくる……ナウマンは大した熱中ぶりだ。僕は彼が休日にも印刷をやらせたのではないかと疑っている。二週間に五枚の印刷全紙が送られてきた。コノ人ヲ見ヨの結びは、全く巨大な創作と言うべき一篇の酒神頌歌だ、——僕は、すすり泣かずにこれを考えることは出来ない。

内緒だが、今度の春にバーゼルへ出掛ける、——それが必要なのだ／いまましいことだ、信頼して物を言える相手が一人もそばにいないというのは……

君の友N

フックス博士が今ケーゼリッツの二重唱曲をダンツイヒの或る音楽会で演奏している。彼はその劇場のためにヴェネツィアの獅子を望んでいる／しかしヨアヒムが関心を持ち続けていることから見

て、この作がホーベルク伯によって直ちに差し押えられてしまったという可能性は大いにある……ケーゼリッツはこのクリスマスの期間に両親のところへ逃亡した、贈り物をして貰わないためにだ……フォン・クラウゼ家の人たちはクリスマス期間に（例の如く）豪華な出費をやっている。例えば、彼等の所有する村々などの家庭にもクリスマスの贈り物の箱を送っている。ケーゼリッツはクラウゼを自分のヴェネツィアの友人、有名なバスイーニのところへ連れて行った、後者に何千マルクかを得させてやるために。——バスイーニは今ベルリンに暮しているのだ。

① ニーチェ自身の誕生日であることは言うまでもない。

② ガストのベルリン移住にはクラウゼ一家の誘いが関係していた（ガスト宛ニーチェ書簡集二四八番の注参照）。同家からの贈り物のことを言っているのである。

三一八、ニーチェより

〔トリノーから一八八八年一月二八日に受領〕

金曜朝。

親友よ、たった今僕は笑わざるを得なかった、僕がまだ安心させてやらずにいる君のおなじみの会計係のことが頭に浮んだのだ。僕が一八六九年以来もはやドイツ国籍ではなくなっており、何回もスイス領事によって更新されてきた実に美しいバーゼル旅券を持っているのだということを聞けば、彼は喜ぶだろう。——

——僕自身は今、反ドイツ連合を作るためにヨーロッパの諸宮廷への建白書を作製中だ。「帝国」を鉄の狭窄衣の中へ締め付け、そし

453

て絶望的戦いへと唆かそうと思うのだ。若い皇帝を、付属物もろともにも手に入れないうちは、僕の手は空かない。

内緒だよ！断然内緒だよ！——心は完全な風ノ十時間ぶっ通して眠った！

N

三一九、ニーチェより

〔一八八八年一月三一日受領、トリノーから〕

断じて違うよ、親友よ、僕の状態は依然素晴らしいのだ。ただ僕があの手紙を非常に悪い光のもとで書いただけのことなのだ——僕はもう、自分が何を書いているのか分らなかつた。また君は、あの「悲しい」報せがちょっとでも僕の心を痛ませたなんて考えてはいけないよ。何年も前から僕の下方に千哩も隔って横たわっている事柄なのだ。——フリッチとの問題を成り行きに任せておくことは、何れにしても理性に適っている。彼は最近の手紙でもまだ、例の数字に固執する旨を言明している。——今日はブルドー氏の実に親切で繊細な手紙を受け取って非常に嬉しい、彼は僕に対して、彼がもう僕のことを色々と知っており彼の友人ヒレブランドンによってずっと前から僕について大いに教わっている旨を述べている。ジュルナル・デ・デバは一月にモノーのペンに成る「ワーグナーの場合」論を載せるとのことだ。——ホイスラーも懇切な手紙をくれた。——

（僕はポンギとも交渉する。——）

「偶像ノ黄昏」(Repuscule des idoles) が最初に着手される。こ

の作の翻訳のためには、既にショーペンハウアーを英国人たちに紹介したヘーレン・ツィンメルン嬢と交渉中だ。——僕がフリッチの場合を幸運事と感じていることを過少評価してはいけない……

僕の手紙は、君と奥さんとに新年のお祝いを言うのに丁度良い時に着くだろう。

君の友

N

——いいかね、僕の外的境遇は今後数年間は全く変化しないよ、若しかすると今後はもう全然。僕の名声は如何なる程度にも達するだろうが、僕は僕の習慣をも僕の二五フランの部屋をも放棄する積りはない。人々はこの種の哲学者に慣れなければならない。——

またもや実に悪い光だ——ロンドン同然 *ダ come in Londra*、とトリノの人たちが六日前から言っている。霧 *Nebbia*、……

僕は、非常に明るいことばかりを君に書いたとさえ思っていたのだが？——正直のところ、僕にはもう全く分らないのだ、怒りと呼ばれているものがどんな風なものであるのか……

① 一八八九年一月一五日にオーヴェルベックがガスト宛に出した手紙によれば、クリスマス頃までのニーチェの手紙によって不安を感じたオーヴェルベックはニーチェに対して、フリッチからの自著買戻しの件に関しては断然思い止まるべき旨を述べると共にその他色々の憂慮を述べた手紙を送ってあった（ベルヌリ書第二巻二二三頁参照）。

三二〇、ニーチェより

〔封筒に入った紙片、一八八九年一月七日受領〕

友オーヴェルベックと奥さんよ、

君たちは今まで僕の支払能力〔四四九頁参照〕に僅かな信用しか示してくれなかったけれど、それでも僕は、僕が自分の負債を支払う者であることを示し得ると思っている——例えば君たちに対して……

〔この手紙の結びは、「僕は今すべての反ユダヤ主義者を銃殺に処するところだ……ディオニッソス。』

◇オーヴェルベックは、ホイスラーがニーチェから受けた手紙と自身が三一日に受けた手紙（三一九番）とによって非常な不安を感じていたところ、一月六日にブルクハルトの訪問を受けた。「窓が道路と道路際の小庭とに面している私の書齋に妻と私とが一緒に座っていた時にヤーコプ・ブルクハルトが木戸から入ってきて私たちの家の玄関のドアの方へ歩いてくるのを見たのは、一八八九年一月六日、日曜日の午後であった。私たちも懸念していた時だったので、ニーチェのことだという考えが最初に私たちの頭に電光の如く閃いたのは当然である。……ブルクハルトの来訪は、その日に受け取ったばかりの驚くべき手紙の報告のためであった。私たちはそれを一緒に読み、私が既に机の中に所有していた同様の手紙の中で不安を強く感じさせるものを交換してみても、忽ちニーチェの状態の一切が明らかになった。私が既に暫く前から想像をためらっていたことが

今や明々白々であった」(オーヴェルベックの手記。ベルヌリ書第二卷一―四頁以下)。その後のオーヴェルベックの行動は、一八八九年一月一五日のガスト宛書簡から知られる、「私は、どう仕様もない絶望感の中で直ちに、ニーチェに直ぐ私のところへ来てくれる様にとの緊急の手紙を出しましたが、翌日相談した私たちのところの精神病院長から二重の愚行だと言われまして、即日直ちに、私自身が直ぐ出発することを電報で報せてやって、まずい結果が起こるのを防止しました。何故なら同僚ウィレ——病院長の名前で——に、ブルクハルト宛の例の手紙と月曜朝に私自身が受け取ったニーチェの短い便りを見せましたら、彼は、一刻も猶予出来ないこと、そして、私がこの場合に何らかの義務を感じるならば直ちに出發せねばならないことを私に疑わせなかったからです」(ベルヌリ書第一卷二三―二頁以下)。オーヴェルベックはその晩に夜行で出發した。その後のことについては北海道大学外国語・外国文学研究第十八号(昭和四十七年三月刊)の拙稿「ニーチェ研究におけるバーゼル伝統」第二節以下を参照されたい。